

## 春を買う

宮下 恵

春が来た。世界はもう完全に春だ。

空気が変わった。三月の終わりの日にはいつも嵐のような風が吹いて、冬の名残の埃達を全て吹き散らして去っていく。その後、春は来る。桜の花、淡い陽光、甘い風、揺れる心、そんなもの達と一緒に。

長い冬後に突然やって来る、この春の圧倒的な明るさ、そして美しさを、認めないわけにはいかない。けれど、その「認める」心の中にいつもどこか後ろめたい感情がある。

つまり私は、この春の素晴らしさに圧倒されきってしまうのだ。春の空気の中を歩いたり生きたりすることは、とても素敵なことなのだが、心には常に春に対する劣等感がつきまとっているのだ。

それは、私が秋生まれだからだろうか？　だが、春以外の夏や冬に対しては、こんな感情は生まれてこない。ということはきっと、私はこの華やかな「春」という季節に嫉妬しているのだ。—いつか、春に圧倒されずに、春を圧倒し返すことは出来ないものだろうか？　大学四年の春だけれど、特に大きな不自由があるわけでもない。院に行くので、就活もしないし。ただいつも通りの、鬱屈した春の日々を送るだけなのだろう……

四月の初め、日記にこんなことを徒然と書いていた私は、ムシヨウに「花見」に行き始めた。ただしそれは、大勢でやるような花見ではなく、こぢんまりと、ひっそりと色々な思いに沈みながら、桜の下で時を過ごしたいという罪のない願いだった。それならいつでも好きな時に一人でふらっと行けばいいのだが、それも心許ない。どうせなら誰か一人、余計な気を使わずにすむ、静かに隣にいてくれて何の害もないような人間を道連れにしたい。そんな思いから、私は久々に長谷川仁に連絡をとることにした。こんな我儘な欲求を満たしてくれるのは、恐らく彼だけだろうと思つて。

高校と大学の途中まで同級生だった長谷川仁は、私が望む「花見」の伴侶に丁度良い人間だった。仁は、心に大きな空洞があつて、そこを常に風が吹き抜けているような印象を与える人物で、それだけに彼を思い浮かべても、他の人のように、人間のもつ様々な、そして大抵の場合面倒な「重み」を感じないでいられた。私の「花見」の伴侶にしたいのは、まさにそういう人間だった。さらに都合のいいことに、彼は四月生まれだった。四月十日

生まれなので、その誕生日祝いを兼ねて誘えば断る理由もないはず。そう短絡的に考えて、私は早速、仁に電話をした。携帯電話の三回目くらいのコールで仁はあっさりと捕まった。「久しぶりだね、元気してた？」という私の第一声には、仁は「ああ」という極めてあっさりとした返事をよこした。数カ月ぶりに聞くその声には、何の感慨や驚きも含まれていなかった。まるで今でも毎日学校で会っているかのように懐かしさや新鮮味を全く感じさせない無関心な仁らしい声の響きに私は安心感さえ覚え、すぐに用件を切り出すことが出来た。

「ねえ、花見に行かない？」

「何で？」

これ以上ないほど簡単に愛想のない仁の返答に私も限りなくシンプルに応戦した。

「行きたいから」

普通であれば成り立つはずのない会話だが、仁の答えは秀逸だった。

「ふーん。いつ？」

「そうだね……」

細かいことについて何も考えていなかった私は、そこで初めて自分の都合を振り返った。大学の授業はもう殆んどなかったが、アルバイトや友達と会う予定もちらほらある。そして週末の人で混み合う日も避けたいことを考慮すると、学校の授業が三限までの木曜日が丁度良いことが分かった。

「来週の木曜の夕方はどう？」

「ふーん」

ここまで来て仁ならいつでも大丈夫だろうとタカを括っていた私もさすがに大学を辞めているとは言え、すでに働いている彼の都合が気になりだしたが「木曜ね、分かった」と、案外すんなりと返事が返ってきた。

「場所は？」

「井の頭公園」

これは、すでに決まっていることだ。私は、井の頭公園の桜が見たいのだ。

「井の頭……誰が来るの、他に？」

「誰も来ないよ。二人じゃ嫌？」

「べつに、いいけど」

「じゃあ、来週木曜の夕方五時にJR吉祥寺駅の公園口改札で」

その約束を取り付けると、仁は「じゃあな」と電話を切った。もう少し話をしていてもよかったのを、ぶつぷりと電話を切られると、不思議な空漠感に襲われる。私はなんだか寂しい気持ちになったので、気を紛らわそうと外に散歩に出た。

春の夜の街は、憂鬱さやどこか心を不安定にさせる独特の匂いと温度を持った空気に占められていた。少し前に止んだ雨が残した湿気のせい、電灯の下の明かりは、もわつとしたくすんだ輝きを周囲に放っていた。私は、電灯の放つ薄靄のような光に見とれながら、歩き慣れた三軒茶屋から下北沢へむかう茶沢通りから一本奥まった住宅街の道、つまりはいつもの散歩コースを、頑なにその道しか歩こうとしない犬のように目的もなく歩いた。夜に沈みきることはない、繁華街と住宅街が見事に混ざり合うこの小さな街は私にとって最早、安心できる部屋のような空間だった。私は、その「部屋」の温かささえ感じられる空気の中に安心して身を沈め、考え事に浸っていた。散歩コースは小学校の前の遊歩道を通る道で、車道に沿って桜の木々が立ち並んでいる。一足先に見る桜は、湿った夜の空気の中に今にも溶けだしそうな薄紅を帯びた小さな花達を、薄暗い洞窟のような幹の上に、今を盛りと咲かせていた。今年の桜は例年よりも早く四月二日が東京の満開日で、その日を境に、満月が完全な円を描いてまた欠けていくように散り始めていた。来週は申し訳なさそうに昼間っから空に出てくる半月のような、不完全な桜を見ることになるだろう。それは私の花見にとっては見頃の時期と言える。私は満開の桜を青空の下眺める、なんていう無粋な花見には興味が無かった。

ああそうだ、とふと私は思い出した。すっかり、仁に誕生日の話をするのを忘れていた。誕生日なんていう名目立てがなくても、仁は何の抵抗もなく不可思議な花見に付き合うことを承諾してくれた。その事実はず私に、仁を花見の道連れに選んだことは正しかったのだ、という満足感を与えた。けれど、ただ付き合わせるだけというのは、少し申し訳ない気がしたので、私は仁に何か誕生日プレゼントを用意しようと考えた。何が良いかは、全く思いつかなかったが。金とか、女とか、食べ物とか、そういう即物的な物を最も好む仁が、貰って素直に喜ぶ物を考えるのは、簡単なことではなかった。人が一生懸命選んだ物であっても、仁は本当に欲しかった物でなければ興味を示さないだろう。私は、誰かに贈り物をする時は相手が本当に喜ぶ物をあげたいので、間違いは犯したくなかった。それで、あれこれ思案を巡らせているうちに、いつものことながら考えは全く別のところに飛んでいった。

仁は春生まれなんだ……。そのことに私の思考は結晶が少しずつ中心に集まるように吸

い寄せられて、もうそこから離れられなくなった。春生まれ。迷信じみていると言われればそれまでだが、春に生まれた人は、やはりその季節と同じように華やかで心に安心感を与える人が多い気がする。仁には「安心感」を与える要素は殆んどなかったが、華やかさは確かにあった。高校で同じクラスだった時は、仁はどのクラスにもいるひょうきん者の一人だった。私達のクラスで何らかの「笑い」が起きる場合、大抵その源には仁がいた。そういった意味では、彼は華やかな影響力をもった人間と言えた。ただ、他人をよく笑わせる人間には二種類あり、本人が笑いたいがために人を笑わせるタイプと、本人は本人の正論を述べて、その「正論」が自分たちとずれているために笑う他の人達を半ば嘲り気味に見ている、というタイプで、仁は正に後者に属す人間だった。つまり、彼は冷静な観察者で、人を笑わせるが自分は笑わない。自分の言葉で回りの人間が無防備に笑うのを興味なさそうに見ている。そういう人間だったのだ。彼の言葉はいつも嘘のようで本当だった。彼が人を笑わせるとき、人はそれを「冗談」ととったが、その実彼は本心を語っていたのだ。普通の人は気が付かないような、些細だけれど、気付かれたほうは肝を冷やすような鋭い事実を、仁は見抜いていた。だからこそ誰も賛成しはしないが、私にとって仁は信用のおける人間だった。大学一・二年の頃の恋人と別れた時、母親が家を出て両親が離婚したとき、私は信頼できる誰かと話をしたくて仁に電話をかけたものだった。そして話すことと言えば、どうでもいいようなこと、ふざけたことで、たまに核心に触れるように自分の悩みに触れても、仁は特に大きくはとらず、それすらもさつきまで話していた。「どうでもいい、ふざけたこと」に属しているかのように軽くあしらった。仁は決して他の人のように、慰めたり、親身になつて話を聞いたりしない。それが有難いのだ。私は、慰めたり、親身になつて話を聞いてもらうのがイヤなのではない。「慰めたふりをする」、「親身なふりをする」人間を見るのがイヤなのだ。仁にはそれが無い。そんな人間の存在は、心が乾き切って、疲弊して、でも何かで埋められることを求めているときに、何より替えがたい。けれども実際には仁はお世辞にも「まともな」人間とはいえなかった。仕様もない女好きで、特定の彼女は作らずに色々な女と寝て回っていたし、耳を疑うような人間とは思えない発言をすることも度々あった。だから通常の意味では、彼は「信頼できる」人間などでは全くなかった。ただ一般的な人達が、上手く罪のないウソをつけて人生を塗り固めているようなことが彼にはなかっただけだ。そんな生き方は決して容易くはないはずで、仁が大学を辞めた理由も恐らくそういう所にあるのだろうと、私は推測していた。

仁が大学を辞めた本当の理由は、私もちやんと知っているわけではなかった。女を孕ま

せたから働かなきゃいけないらしい、なんて馬鹿げた噂も飛び交っていたが、本人に聞いたところそんな事実はなく、ただ他にやりたいことがあるので大学に行っている時間と金が勿体ないと考えたからだ、ということだった。仁にとっては大学なんて大して意味のある場所じゃなかっただろう。でもだからと言って、彼がびったり適応できる場所がどこか思いつくわけでもなかった。彼は常にどこにも属することができない、いや、属することが必要としない人のように見えたから。

結局、下北沢の街の外れまで辿り着き、茶沢通りを真っ直ぐ引き返してきた一時間弱の間で、仁への誕生日プレゼントを決めることはできなかった。家に帰るとさすがに疲れが出て、すぐに寝てしまったので。

翌日は木曜日で、花見の日は丁度一週間後だった。それまでに私も、仁へのプレゼントを準備しなくてはいけなかった。服とか時計とか、男の子にあげるプレゼントの定番を考えると恋人のようで違うな、と思ったり、音楽や本に類するものは個人の趣味が強く出るので難しいなと考えたり、私はそれほど大きくない悩みで平凡な日常を埋めることが出来た。だが結局全く思いつかないしていると、土曜の夜に飲み会の誘いが入った。それは、やはり高校の同級生で、昔少し付き合っていたことのある平井からの誘いだった。予定がなかったので行くことにしたが、その時代の友人達に会うのは久々だったので、少し緊張した。

偶然にも、飲み会は吉祥寺で行われた。夜七時に、アーケード街側の駅前に集合し、チーン店の月に一度は行くような居酒屋に入った。そして、その場所にいた時間のおよそ九割を、高校時代の思い出話や同級生の動向に関する話で埋めた。

そういった話は、楽しくもあるけれど、今となってはもうどうでもいいことが大半だった。誰がどこに就職が決まって、誰それがまだ就職活動中、あいつは彼女と別れ、あの子には彼氏が出来たらしい……とかそんなような話だ。

けれども、最後の最後で話題になったことは、それまでの話題と同じように簡単にあしらせるものではなかった。

「そーいや、片島さんと青井、七月に結婚するんでしょ？」

「まじで？ あのと二人、いつかは結婚するだろうと思ってはいたけど、もうしちゃうの？ 卒業前に？」

「そう。片島さんはもう働いてるから別にいいとしても、青井は卒業前だから学生結婚になっちゃうけど、あいつが内定とった会社、大阪の会社だから、卒業したらすぐに、向こ

うで生活できるように早めに結婚式挙げるんだと。今日二人とも来れなかったのは、結婚式の準備が忙しいからなんだよ」

誰かが言いだしたこの話題は、身近な者同士のこともあり、すぐに話題を独占してしまった。その中心には、いつも通り平井がいて、信頼される中心者としての役割をしつかりと果たしていた。

青井君。私が高校生の時にずっと好きだったその人は、片島敏子というやはり同じクラスにいた女の子と高校三年生の時に付き合い始め、彼が大学に進み彼女が短大に入ってもずっと付き合っていて、遅かれ早かれ結婚するのだろうと言われていた。でも、それがこんなに早いとは正直思っていなかった私は、そもそも参加することさえ考えていなかったこんな突発的な同窓会で聞かされたために、予想外の先制パンチをくらった状態になっていた。とはいえ、もうずっと昔に諦めた恋だ。どうしてそれがこんなにも心に重くのしかかるのだろうか。酒のせいだろうか。それとも、春のせいなのだろうか。

片島敏子は春のような人だった。小柄で柔らかそうな白い肌の女の子で、黒目がちなその目は水分を多く含んでいつも潤んでいた。声もまた、透き通って高く綺麗な声で、よく響くその声で誰かを呼ぶと誰もが振り返るので、恥ずかしそうに肩をすぼめる仕草が、癩に障るほどに魅力的だったのを覚えている。

敏子は男女関係なく誰からも好かれる子だった。担任の高野先生からもずいぶん可愛がられていた。彼女はクラスの「相談役」で、誰の悩みにも親切にまた真剣に耳を傾け、まるで心理カウンセラーでもあるかのように、皆に祭り上げられていた。

でも私は、恐らく私だけは、敏子と余り仲が良くなかった。彼女の根本的な明るさ・人への信頼・深い優しさや同情心といったあらゆる「善人的」要素が、私の中にあるそれらの真逆へ向かおうとする志向と反発作用を起こして、彼女に近づくのを拒んでいた。その感情は、私が「春」に対して感じるあの劣等感に似ていた。多くの人に歓迎される暖かで優しい春の光は私には少し眩しすぎた。私には、秋の穏やかな光が丁度いい。だから花見も夜が良いのだ。

飲み会の帰り、平井の提案で、行ける人はこのまま井の頭公園に花見に行こうぜ、という流れになった。私は当然行かなかった。大勢でやる花見は意味がない。誰も「花」を見ない「花見」は意味がない。私が帰ると言ったら、平井は怪訝な顔で「何か用でもあるの？」と聞いてきた。平井は素晴らしく気の利く、心の広い信用の置ける人間だけれど、こういう自分の全てを「正しい」と決めつけているような無神経な部分は、昔から全く好きにな

れない。だから私は、あまり具合が良くないと言って、そう言った瞬間から必要以上に心配するような態度を取り始めた平井に対し素気なくらいの挨拶をして皆と離れた。

その夜、久々に夢を見た。それは悪夢だった。起きた瞬間に、「これは悪夢だ」と明確な言葉にして断定したほどの。

夢の中で私は京都駅にいた。JR京都駅の新幹線のホームで、これまた高校時代の同級生である奈々子が、私に面と向かってこう言った。

「私、青井君と結婚するから」

奈々子があるので、青井君と？ という当然の疑問が湧く余裕もないほどに、奈々子の表情は真剣で絶対的だった。彼女はその一言だけ言い残すと、そのままどこかに立ち去ってしまい、私には平井から携帯メールで連絡がきた。それは、私が東京に戻ってきたら吉祥寺で二人の結婚祝いの飲み会をしよう、というものだった。そこで目が覚めた。が、目覚める直前まで見ていたその夢をはっきりと記憶していたために、目覚めたときの感情の揺れは尋常でなかった。

まず、青井君と結婚する、というのが奈々子であることが引つ掛かった。奈々子は私の親友だったし、そもそも敏子と結婚するはずの青井君が奈々子と結婚するわけはないのだが、そこは夢の不条理さで片付けられるとしても、それを私に告げるときの奈々子の、あの強い表情、もう動かし難い事実を伝えるときの絶対的な口調。私を新幹線のホームから線路に突き落とすよりも、一層深刻に唐突に、心を抉り取るような言葉で、彼女は私を絶望の淵に突き落とした。もう、青井君の結婚という事実は、覆すことは出来ない。それでも、どうしても最も信用しているはずの友人にこんな形で裏切られる夢を見るのだろうか。しかも、尚更私に嫌な感じを与えたのは、この夢が全くあり得ないことだとは思えない、という自分自身の感情における事実だった。その、日常はどこか深いところに隠れている暗い意識が、こういう形で夢に現れること、最も信用しているはずの人間すらも、どこかで疑っているという事実、それに対して私は「悪夢」と言うのだ。

起き上がったって窓の外を見ると、空は晴れ渡っていた。この常になく重苦しい心を抱えて一人でいるのは耐えきれないと思った。それで私はやはり仁に連絡をとってしまった。だが、仁は電話に出なかった。仕方がないので、仁へのプレゼントを買いに街に出かけることにした。

三軒茶屋から田園都市線で渋谷に出て、ぶらぶらと百貨店や路面店を覗いたりしている間に仁から折り返しの電話が来た。出ると「なに？」という仁の声がして「いや、暇か

なと思って」と答えると「今、起きた」と言う。「私今、渋谷にいるんだけど、夕方くらいから出てこない？」と言うと「まあ、いいよ」という返事だったので、私は夕方まで渋谷で仁を待つことにした。街をうろついても余り面白いプレゼントが見つかる気配もなかったのも、じゃあいいや、仁の誕生日はまだだけれど、ちよつと美味しい御飯でもご馳走してあげるか、と思い店探しを始めた。丁度彼の誕生日は明後日に迫っていた。宮益坂の裏手に、前にアルバイト先の人達で行ったことのある小洒落たカフェレストランがあった。そこは個室もあるし丁度いいかと思われた。ご飯も美味しかった気がする。こんなことをしていると、まるで仁の彼女だな、と考えて一瞬変な感覚を覚えたが、こんな状況も珍しい面白いじゃないかと気を取り直した。まだ時間があつたので青山通りを表参道の方まで歩いて行き、ブランドショップの立ち並ぶ中にある高級な雑貨屋を物色して、モダンなデザインのジップを見つけた。深緑色のケースが仁のイメージと良く合っていたし値段も手ごろだったので、すでに仁を「心から」喜ばすことを半ば諦めていた私の妥協策として無難な選択をした。それを買ってラッピングしてもらおうと、もうこれで花見につき合わせるのに十分な賄賂を用意しただろうと満足した。仁が来るまでにまだ時間があつたので、スターバックスでコーヒーを飲みながら本を読んでいると、今度は平井から着信があつた。折り返しの電話をしてみると「今、新宿にいるんだけど、お前はいま何してる？」と言われた。「渋谷で仁を待ってる」と答えると、「仁？ 長谷川仁のこと？ お前、仁と遊んだりしてるんだ？」と、どうやら驚いたらしかった。その驚きもどうかと思っていると、「実は青井と片島の結婚祝いに、みんなのメッセージを集めてアルバムを作ってあげようと思つててさ、中井とかと買いに来てるんだけど、お前も来るかなと思つて。奈々子とかも後で来るぜ。仁と一緒にこっちに来れば？」

またか。奈々子とか青井君とか、最近は高校時代の友人達の名前が頻繁に周囲を飛び交う。もう少しうんざりして、「じゃあ、仁に聞いてみるよ」と電話を切った。仁には言わないでおこうと思ひながら。

結局、六時を回っても仁から連絡がなかったので、私はキャットストリートを歩いて渋谷まで戻り、井の頭線に乗って下北沢で降り、しばらく古着屋や雑貨屋、古本屋を巡ってぶらぶらした後、もう特にすることもないので歩いて家まで帰ることにした。風に残る冬の冷たさがスプリングコートを貫いて身に沁みたが、その風にも空気そのものにも、春を察して蠢き始めた植物達の甘い匂いがそこはかとなく感じられた。何となく人恋しい気もして、誰かに連絡をとって会おうかとも思つたけれど、どうせ明日の夜に由子達と会うし、



今日は帰ってゆっくりしようと考え直して、まっすぐ帰路についた。春の匂いは無駄にせつない感情をかきたてるから良くない。そんな「春の匂い」に容易く屈したりしてはいけないのだ。

花見の木曜日は、朝から天気が悪かった。重苦しく垂れこめる灰色の雲の下、降ったり止んだりの雨に桜もだいぶ花を散らしたようだった。翌日以降だったらもう半分以上散って若葉の萌える、赤いガクばかり目立つ花見をすることになっただろう。でもだからこそ私にとって、それは花見日和だった。雨の下の桜は、水もしたたる良い桜とでも言いたくなる艶やかさがあるし、それも夜になれば一層の神秘性を帯びてくる。私は、その景色を何年か前に見たことがあるのだ。記憶にこびりつく美しい景色。ある空気、ある風景の記憶は果てのないものなのに、やはりこれもまた一つの小さな部屋のように、自分の身辺にまとまったものとして思い出される。そんな思い出の世界へと、私は戻っていきける気がしたのだ。その道連れに仁は最適なのだ。彼は、その思い出に少なからず関係のある人物だし、私が思い出の世界に浸るときに、その邪魔をするような人間でもないからだ。邪魔をしない、というより、私に関わってこない、と言った方がいいかもしれない。彼は誰もが当たり前にする、ただの潤滑油としての本来不必要なコミュニケーションをわざわざとったりしない。ハイデガーのいう「空談」がないのだ。それはとても哲学的な志向とすら言えるな、と私は井の頭線吉祥寺駅のホームに降り立って改札へむかう人の流れの中で考えていた。

仁は吉祥寺駅の待ち合わせ場所に五分ほど遅れてやってきた。久々に見る彼は、グレーのパーカーを白い安っぽいロゴの入ったTシャツの上に羽織り、濃いインディゴのジーンズといういでたちだった。そしてなぜか、スニーカーの色は赤だった。決して大柄でない仁の顔は、記憶しているよりも更にもう一回り痩せて小さくなったようだった。

仁は私を認めるなり、疲れた表情で「ねみい」と言った。若い男特有の傍若無人さが、仁の場合は何かしら厭世的な態度と繋がって、状況に応じて形の変わる一般的な傍若無人さとは違った軽さを生み出していた。軽いだけに、おいそれとは変わらない「傍若無人」さ。仁のその態度が他人に悪い印象を与えることは少なくなかったけれど、往々にして女はそれを好く。だからなのか、仁からはいつも女の匂いがした。

吉祥寺駅から井の頭公園に向かう道幅の狭い通りは、平日にも関わらず人が多かった。自分たちと同じような学校が早く終わってぶらついていると思われる学生らしい若者が目立つ通りを仁と、たまに道沿いの店を覗きながら公園に向かった。昼まで降っていた雨は

止んではいたが、濃灰色の雲に抑圧された滴たちは、いつまた重みに耐えかねた雲から降り落ちてくるかと思うほど、どんよとした湿った空気が街を圧していた。

何もかも、私の思った通りだった。私が夢見た「花見」に必要な条件は揃っていた。湿った空気、鬱々とした灰色の空。井の頭公園。散り始めた桜。普段なら、その「どんより」とした閉塞感漂う天気にも、気もそぞろになる私が、一緒にいる仁に煙たがられるほど今日は元気だった。公園通りで入った店で、服を一枚買った。欲しかった真紅の半袖のニットカーディガン。「お前が赤なんて着るの」と仁に冷ややかな目で見られながら、数年ぶりに赤い色の服を買ってしまった。赤い色の服は、どんな時代でも女の子の最も憧れる品の一つだ。

お買い物をする、気分はまた上昇する。少し小腹が減ったので、いせやで焼き鳥を買って食べながら、公園への入口、石の階段を降りて行った。階段を降りきり、公園の敷地内に入る。雨でぬかるんだ土にパンプスのヒールがいちいちめり込む感覚が面白かった。そこまで来れば井の頭池はもう目の前だった。見慣れた、池の中央にかかる、というかその一部と化している幅の広い橋を起点に、池の周囲をぐるりと囲む土の歩道が左右に始まっている。ぬかるんだ足元に気を取られ、満開という絶頂期を過ぎた桜に見向きもせずに通り返っていく人々を尻目に、私はすでに半分以上花の散ってしまった桜の木々を周囲に巡らした深緑色に澱む井の頭池を前にして、これ以上ない満足感に浸った。仁は何も言わずに隣で煙草を吸っていた。「何だ、桜散ってるじゃねえか」とぶつぶつぶやきながら。けれどその言葉は、それが示す意味ほどの感情を帯びてはいなかった。桜が満開であったとしても、同じようなことを仁は言っただろう。その思考は私の好奇心を一時的に強く刺激した。

「仁は、満開の桜が見たかったの？」

「いや、俺は桜には大して興味ないから、何でもいいけど。散ってる桜は尚更見るべきもんでもないだろ」

「そう？ 私、満開の桜より、よっぽど今の桜のほうが好きだけだな」

「お前は変な奴だからな」

仁の無関心は、桜と私とを同等にしてしまった。それは何よりも喜ばしい讃辞だった。

「私、池の周りを歩きたいんだけどいいかしら？」

「まじ？ 靴が汚れるな。まあいいけど」

仁と一緒に井の頭池の周囲を歩く。私はその景色と空気とに浸りきりながら。仁はたま

に煙草を吸いながら。特に私達の間には会話はなかった。傍から見れば、もう数年の付き合いになる落ち着いたお互いを信頼しきった良いカップルに見えたかもしれない。けれどもこれほどお互いを知らない二人もいなかった。私はそれほど仁という人間の背後にあるものを理解しているわけではない。勿論、仁も私を知らない。さらに興味もない。ただ感覚的な信頼だけは成立している気がしていた。少なくとも私の側にはそれがあつた。その「信頼感」には恋愛感情という不純物が全く混じっていないために、私は仁の傍らにあつて落ち着いていられた。つまり、私は仁に対して自分を作ることをしなくていいのだ。仁といふ時でも、私は私の内側にある世界に没頭してられる。それはとても有難いことだった。たまに私は仁から煙草をもらった。そういう時は、何か当たり障りないことを話しかけた。

「仁は井の頭公園好き？」とか「最近、何してるの？」とか。仁の返答は決まって短かった。「最近」の質問になんて「何もしてない」という返事だった。仁のそういう態度は、所謂「素気ない」という態度なのだけれど、私にとっては不快ではない。なぜなら私は仁に余計な優しさや気遣いを全く期待していないから。でも、大多数の女の子にとつては彼のこういう傲岸な態度は我慢ならないものなのだろう。それは自分たちの「女性的特権」が否定されるに等しいからだ。存在の危機に対して彼女達は敏感に防御の姿勢を作る。仁がよく「女の敵」のような言われ方をされるのは、ここにも理由があると言えるだろう。

ただ目的もなく井の頭池の周りを一周しているうちに少し疲れてきたので、私達は池端の公園にあるブランコに座った。鉄の吊り棒は湿っていて、雨水に濡れたプラスチックの水色の座席の溝には汚れた桜の花びらが沢山へばり付いていた。仁は隣のブランコに無頓着に座ると漕ぎもせずに、また煙草を吸っていた。私は久々のブランコが嬉しくて思い切り漕いだ。あたりはすっかり暮色に包まれていた。晴れていれば青く霞むはずの春の夕闇も、雨と曇り空のせいで乳白色を帯びた独特の色彩を持っていた。厚い雨雲に遮られながらも、まだ地上に未練がましく色彩を送り込もうとする夕日のオレンジ色を含んだ乳白色の中で、白っぽく光る残骸のような桜の花びらと池の水面の深緑と、電灯に照らされてそこだけが異様に鮮やかな若葉の新緑とが、視界の中で光の曲線になって揺れた。

湿り気が多い澱む空気の中を泳ぐように飛びながら、私は四年前に高校のクラスメイト達と行った夜の花見の記憶を思い出していた。

それは高校三年の新学期が始まるちょうど前々日だった。進学校だった私の母校では、本格的な受験期間を目前に新三年生がクラスごとに勉強合宿を一泊二日で春休み中に行う、という慣習があつた。この「勉強」合宿というのは実は建前で、実際の目的は辛い受験シ

ーズンを前に受験生同士の連帯をクラスごとに深めることで、精神的なバックボーンを作る、というものだった。春休みの約三週間の中で、それぞれのクラスの代表がくじをひいて当てた日程が、そのクラスの宿泊日となるのだが、その年、私達のクラスは始業式の前々日の日取りを引き当て、二日目の昼には解散になるので始業式前日に一度帰宅できるものの、ほぼ二日春休みが早く終わってしまう形になった。この事に多少反発するクラスメイトもいたが、実際に休暇中の学校に集まってみると非日常的な雰囲気になり飲み込まれてクラス全体が浮足立っていたのは、いかにも十代らしい無邪気さが発揮された感があった。オリエンテーションは他の生徒が誰もいない奇異な空間としての学生食堂で行われて、春の宵闇が中庭に面した大きな窓からのびこんでくる、その見慣れた場所の異様な空気に十代の高校生達はあつという間に酔っていた。

その夜、夕食後の自習時間とその後の研修と称された懇親会のようなものを終えて、女子と男子はそれぞれ別の宿泊部屋に分かれた。しかし早速、先生が別棟の職員用宿直室に泊まっているのをいいことに、男子のうち数名が女子の泊まっていた書道教室に忍び込んできて、「一緒に学校を抜け出して、井の頭公園に花見に行こう」という半強制的な提案をした。その年も開花が早く確か同じ四月二日が満開日だったので、一週間ほどたったその頃にはすでに半ば花は散っていたのだが、折角名所が近くにあるのだし、何より「夜中」に「男女一緒」に「学校を抜け出す」ということに言いようのない魅力を感じて、私たちは結局、総勢二十人くらいで、夜の校舎を抜け出した。その中には仁もいたし、青井君もいた。みんな見つかったら怒られるという後ろめたい状況の共犯者として、その瞬間を楽しんでいた。または楽しんでるように見えた。

書道教室は二階だったから、私達は渡り廊下を通過して向いの職員室や宿直室のある校舎の一階に下り、正面玄関から外に出た。先生に見つかるとは危険はあったが、私たち生徒が普段出入りする通路門は夜になると完全に締め切られていて、しかも正面玄関より幅が狭くて高い門だったので、夜中の出入りは基本的に正面玄関を使っていたのだった。当時は学校の警備も今ほど厳しくなかったもので、門番のおじさんもその時間には帰ってしまったっていて、夜中の学校は出入りしたい放題だった。私たちは正門を出て敷地を取り囲む壁沿いに裏手に回り、校舎の後ろ側を通る玉川上水の遊歩道へ入った。この道には舞い落ちた桜の花びらが土に嵌めこまれて模様のようにになっていた。まばらに現れる電灯も鬱蒼とした木々に覆われてその光を遮られている暗い川沿いの道は、普段は乾いて灰色に近い道だったが、夜になってから少しだけ降って止んだ雨と夜の暗さそのものによって

今は黒く艶っぽく輝いていた。玉川上水縁を覆うのはケヤキやクヌギといった落葉樹の林なので、桜は所々沿道の民家の庭に現れる程度だったが、十五分か二十分ほど歩いて井の頭公園の池の端まで来ると、池をぐるりと囲む桜が夜闇の中に、そして黒く光る水面にもその桜の反映が一面に白く茫洋とした光を放っていた。まだこの時期ならいてもおかしくはない花見客も雨のせいで殆んど帰ってしまったようで、辺りは閑散としていた。暗い静寂が取り囲む、都会の中に忽然と現れた自然の前で私たちは一斉に足を止め、しばらくその場にじっと佇んだ。目の前の井の頭池は桜と電灯の反映を除いては、ひたすら暗く、どこからが地面でどこからが水面だか分からなかった。どのくらいの時間そうしていただろうか。恐らく一、二分程度のことだったろうが、誰もその瞬間だけは声も立てなければ、靴音一つも立てなかった。早い虫の音と、遠くを走る車の音、そして何と表現していいかわからない、水や木や土や空気それ自体が放っている「音」なのかすら分からない不思議な鳴動だけが、静まり返った空間に響いて、その全てを私たちは共有していた。でも、それはほんの一瞬間だった。その瞬間が過ぎると私たちは照れ隠しのように笑いはしゃぎ、落ち着く場所を探して小さく公園のようになっていく広場まで歩き、着くとそれぞれブランコに乗ったり、池にかかる橋の方にはしゃいで行ったり、道端に一定の間隔をおいて配置されているベンチに座ってお喋りを始めたりした。

男子のうちの何人かは早速、持ってきたボールでキャッチボールを始めていた。私は手近なベンチに座って、たまたま一番近くでキャッチボールをしていた仁と青井君の観客となった。いつもだったら、そんなに直接的に青井君を見るようなことは恥ずかしくて出来なかったのだが、雨と夜と桜によって気持ちが高揚していた高校生の私は、とても自然に当たり前のように、興味深く彼らのしなやかな体の動きと、闇を背景に白いボールが美しく弧を描いて右に左に移動する様にひたすら見入っていた。その単調な動きも、たまにどちらかがボールを取り損ねて追いかけて行く作業で中断が入り丁度いいアクセントになった。しばらくキャッチボールをした後、二人は汗をふきながらベンチに休みにきた。仁は図々しくベンチにどつかと座りこむと、「ああー。疲れた。やっぱ久々のキャッチボールはカラダにコタえるねえ」と大きな声を出した。仁は高校二年の終わりに野球部を辞めていたのだ。二人がけでいっぱいになったベンチの前で従順に青井君はしゃがみこんで、仁を見上げた。仁は、私の傍らでジャージのポケットから煙草の箱を出して、その底を中指で軽く叩いた。手品のように一本の白い煙草がひゅつと半分ほど外に出てきた。その白は夜闇の中で、桜の花と同じほど異様に目立って光っているようにさえ見えた。仁はそれをつ

まみ出すと口にくわえ、煙草の箱をベンチに置いて今度はライターを出した。手で風から火を守りながら煙草に火をつける。こんなに近くで誰かが煙草に火をつけるのを初めて見た私はその一部始終を興味を持って見守った。女の人がお化粧するのを何とはなしにじっと見入ってしまうように。私の執拗な注視に気が付いた仁は、こちらを見るとその火の付いた煙草を口元から外して私の顔の前に突き出した。「吸うか？」私は微かに笑って「吸わないよ」と答えた。青井君が口を挟んだ。「おい仁、長沢さんを悪の道にひきいれちゃだめだろ」そして私の方に向き、「ねえ」と笑顔で相槌を求めてきた。これにも私は微かに笑って応えただけだったが、心臓の鼓動が俄かにいつもの三倍くらいの速さになったので、すぐに笑顔は元に戻り、視線は私と仁との間に無造作に隣合わせに置かれていたグローブと煙草の箱の方へと落ちた。それに合わせて青井君も同じ方へ視線を落とした。彼は、その視線の先にある静物の組み合わせを見て、とても純粋にこう言った。

「こんな悲しい光景を見るなんてな」

仁は鼻をふんと小さく鳴らしてそのまま煙草を吹かし続けた。青井君が仁の方に顔を上げた時、彼は笑ってはいなかった。が、それはほんの数秒間のことですぐにいつもの優しい柔和な笑みが口元に戻った。けれど、そこには何か「はかない」感じがあった。その「感じ」に私は、自分の心が縛られていくのを感じていた。それは頑丈な縄ではなく、柔らかな毛糸のような素材の糸が幾重にも幾重にも心に巻きついてきて、少しずつぎゅっと締めつけられていくような感覚だった。

高校二年まで一緒に野球部の仲間として部活動に励んでいた青井君にとって、仁の突然の脱落は悲しいことだったのだろう。ろくに部活などやったことがない私には、青井君の思いは想像でしか理解することができなかった。けれどもそれが、自分には永遠に属することのできない「男の子」の「友情」のそして「スポーツ」にまつわる世界であっただけに、何か神秘的な自分の理解を超えた絆がある気がして、その絆がもたらした彼の純粋な感情に、私はうたれたのだった。その瞬間、それまではただの「好きな人」に過ぎなかった青井君への思いは、繊細な悲しみを帯びた彼の優しい心への強い憧憬へと変わった。当時まだまともに恋をした経験などなかった私にとって、それは一つの事件だった。そして、その心が最も柔らかい時期に焼きついた刻印のような感情は、ある種の詩情をもって、それにまつわる記憶をいつまでも残してしまった。そのときの青井君の澄んだ声と、真夜中の桜を反映するように青白く浮かび上がった、俯いた小さな横顔と細い首筋ともに。春が来ると、いつも決まって井の頭公園の桜を見たい欲求にかられるのは、この時の思い出を

何度でも蘇らせたいという儂い希望の表れなのかもしれない。

井の頭公園を出て、もと来た道を引き返し、途中で曲がって少し歩いたところにあるカフェレストランで私と仁は夕飯を食べた。食後のコーヒーを飲んでいる時に、「誕生日プレゼント」と言ってテーブル越しに例のジッポが入った包みを渡すと、仁はお洒落な包装紙にお構いなく豪快に引き裂いて箱を取り出し、無造作に蓋を開けて中身を確認した。仁は、親指と人差し指でジッポを取り上げて目の高さまで持っていく、じろじろと物品を点検していた。そして口をへの字に曲げて、テーブルの上にそれを放り出した。

「お前、たいして金持ってねえな」

仁はにやりと笑って私を見た。私はさすがにむっとしたが実際にそんなに高額なものはなかったので、少し顔を赤らめて「普通の学生なんだから持ってるわけじゃないじゃん」と言った。仁は、「キャバ嬢でもやればいいのに。そしたら男買えるくらい、すぐに稼げるぜ」私は彼の話の意図が分からずに、仁を見た。恐らくこれ以上ないくらい怪訝そうな顔をしていたと思う。それに対してなぜか仁も少し怪訝そうな表情で私を見返した。

「お前、なんで今日俺を誘ったの？」

とたんに私は了解した。仁は、私が自分に気があると思っていたのだ。それに気がつくと急に堪え切れなくなつて私は笑いだした。すると今度は仁の方が、むっとしたようで、「いやいや、この状況だったら誰でもそれを思うでしょ」

「そんなことあるわけじゃないじゃん。今さら！」

私は笑いすぎて涙ぐんだ目を拭きながら仁を見返した。が、仁はもう全ての話題が終了したかのように何事もなく食後の一服を吸い始めていた。

吉祥寺駅で仁と別れた後、私はまだ先ほどの仁の勘違いの顛末について考えていた。どうして仁は、自分に気があるように思う女に対して「男を買う」という言葉を使ったのか。そういえば仁は昔、「俺は女とやるために金を出すのは嫌だから風俗にはいかない」というようなことを言っていたことがあった。仁にとって、女は男が金で買うものではなく、女が金で男を買うものらしいのだ。それは仁らしい考えではあったが、とにかく仁にとって愛は金というものと密接に関連付いたものようだった。「男を買う」。その言葉は何事かを暗示するようで、それ自体が持つ腐敗した忌まわしいそれでいてケバケバしい軽薄な感じ以上の何か、もうすぐ思い出せそうで思い出せない人の名前のようにもどかしく私の心の中に消えては浮かんた。ふと「買春」という言葉が浮かんた。「春を買う」。人は春というこの世で最も魅惑的な季節を金で買うことが出来るのか。そんな風に考えていくと春

に対して反抗する手立ては、他のどの手段よりも卑俗的な方法である、この金による困い込み以外ないような気がしてきた。

その数日後に起きた出来事は、今思えばこの春の最大の奇跡であり、季節が私に何事かを話しかけてきた最初の時だったとも言える。この日、電車で一時間あまりしか離れていない実家に戻って、昼間からいつものように競馬中継を見ていた競馬狂いの弟に便乗して買った無名の馬の馬券が、万馬券になったのだ。

日曜の午後にテレビに写される競馬中継は、子供の頃は退屈極まりないものでしかなかったが、大人になるにつれて、付き合う男たちの影響やバイト先の友達の影響に感化され、何度か競馬場にも連れて行ってもらったりしたこと、その面白さには少しずつ目覚めてきていた。その日、まさに日曜の退屈な午後の時間を持って余っていた私は、さらに自分の持っている「もの」全てを無駄に消費したい欲求にかられ馬券を買ってみようと思いついた。パソコンで出走表を確認しながら、ノートまで出してきて何か書き込みつつ予想を立てていた弟に、次のレースの穴馬を聞いてみても、びんと来る名前がなかったのも、自分で出走表を見たら「ラストスプリング」という名前の馬を見つけた。去年の春、なのか、最後の春、を意味するのは図りかねたが、なんとなく春という季節の無常さを告げる響きがあったので気に入って、五百円分単賞で買って、と弟に頼んだ。「そんな単賞で買ったって負けるだけだよ。どうせやるなら、せめてあと二頭選んで三連単でも買えば？」という弟の意見を鵜呑みにし、私は同レースで一番人気の馬と二番人気の馬をそのまま一位二位予想にして三位をラストスプリングにし三連単を五百円分買った。五百円にしたのは財布の中に五百円玉しかなかったからだ。パドックの中継になってラストスプリングの姿を確認すると、葦毛の馬だった。そのくすんだ白に近い灰色が、薄れていく春の日に近いような印象を与えた。「この馬来ると思う？」と弟に聞くと「人気そんなにならね、来たらすごいけど、どうだろうねえ」という極めて曖昧な返事だった。聞き慣れたファンファーレとともに疾走し始めた馬たちの丁度真ん中の集団にラストスプリングはいた。葦毛なので、いつもは自分の買った馬をすぐに見失う私も判別が出来た。どうしたって確率的に三連単などが簡単に当たるはずがないことくらいは承知していたので、私は面白半分はそのレースを見続けた。どうしてこの馬たちは自分たちの目指すべきゴールがわかるのだろうか、とか、馬たち自身には競争心はあるのだろうか、という泡のような疑問が浮かんで消えた。一番人気の馬はずっと二番手につけていた。さすがに、最後の直線まで結果は分からないという競馬の鉄則は知っていたので、レースの前半をずっと一



番手で走り通してきた黒毛の綺麗な馬が、その一番人気の茶色い馬に抜かされても驚きはしなかった。問題はそれからだった。その時、いつの間に二番手集団の中にいたラストスプリングが手前から抜けてきてあつという間に二番手の黒毛を抜き、さらに茶色に追いつけ追い越せ、という状態になった。そこに上手い具合に二番人気の馬が追いついてきて、ラストスプリングは少しその二頭の一着争いに後れをとる形となった。そのあたりから私は笑いが止まらなくなった。それは、期待もしていなかった奇跡が実現されようとしているという不可思議な現実を受け止めることが出来ない時に稀に起こる現象だった。

こうして、ラストスプリングはハナ差で三着ゴールをした。一番二番人気は予想通りの着順だった。弟は私が勝った馬券を再確認すると驚愕にひきつった顔になった。「姉ちゃん、これすげえ額になるよ」

しばらくして払戻金の発表があつたとき、私たちはさらに愕然とした。三連単で十七万一千二百十三円がついていた。つまり、五百円が約八十五万円になったのだ。その金は週明けに弟の口座に振り込まれる。私はフリーターの弟に口止め料として十万円をあげると約束した。父や母に知られるのは、仕送りをしてもらっている身として余り都合が良くなかった。

月曜と火曜の二日に分けて無事に約束通り七十五万円が自分の口座に弟から振り込まれたのを確認した私は、残りの金をどう使ってやろうかという考えにとりつかれた。旅行をしようか、貯金しようか、何か普段買えないような大きな買い物でもしようか。半分は貯金するとしても、手元に四十万の金がある。私はこれを春からの賄賂だと思った。月のアルバイト代が十万円にもならない大学生にとって七十五万円という大金は十分な賄賂だった。「誰からも好かれなければ気が済まない」春が、私の存在に気がついて金を渡してきたのだろうか。それならば、私は春を買うということになる。買春。ならば、男を買ってやろう。真っ先に候補として頭に浮かんだのは仁だった。私は、仁を金で買おうと思った。

その晩、私は早速仁に電話をした。その内容は以下のようなものだった。

「はい」

「仁？ 今電話、大丈夫？」

「ああ」

「あのさ、かなり急な話というか、唐突な話なだけどさ」

「あ？」

「私のひもにならない？」

「……。 (しばし沈黙) は？」

「まあ、ひもとというと聞こえは悪いけど、軽いアルバイト感覚で、お金払うから暇な時にちよくちよく私と遊んでほしい、というお願いなのよ。どうかしら？」

「どうって……。何それ？ 意味わかんねえし。しかも、大体何でお前そんな金あるの？」

「いや、ちよつとした臨時収入があつてさ。人生で一度くらい、純粹に自分のためにお金を使つてみたいと思つたのよ」

「……。 (二度目の沈黙) で、俺は何をすればいいの？」

「例えば、私が付き合つてほしい時に、一緒にどこか出掛けてくれたり、遊んでくれたり、話してくれたらすればいいんだよ。まあ、無理なお願いはしないからさ」

「……。 (三度目の沈黙) お前、大丈夫？ 他に友達いないの？」

「いや友達はさ、誘う時に相手の都合も考えないといけないじゃん？ でも、そういう余計なことは一切気にしないで、誰かに買い物や、散歩や美術館行つたりとか、そういうことに付き合つてほしい時つてあるじゃんね？ 何というか、一人で行つてもいいんだけど、誰かと一緒にいたいくて、でも気は使いたくない、つていう感じのさ。わからない？」

「まあ、それはわからない気もしないけど……。 お前、大分病んでるな。病院行つたほうがいいんじゃないか？ まず先に」

大体この頃には、私も湧きあがつてきた羞恥心のために、顔に血が昇つてきていたと思う。この後は、数度目の沈黙が電話越しにしばらく続いた。「で、いくらくれるの？」と沈黙を突然破つた仁に聞かれて、一瞬止まつてしまった。それについては何も考えていなかったのだ。とっさに日給一万円、と答えていたけれど、それが妥当だろうと思う。週に一度は必ず呼んだとして、五日×一万円＝五万円が月額だ。さらに会つて食べたり遊んだりするときの金銭も私が全て負担しても、そう簡単に四十万円が消費されるとも思えない。月五万だとして、八か月は続けられる計算だ。でも八か月もそんなことをしてはられないだろう。せいぜい三か月程度が関の山だ。もし万が一、四十万円の現時点での予算が底をついたとしても、余裕はまだあるわけだし。アルバイトもしている身としては、当分金に困る心配はない。純粹に楽しめばいいのだ、この春を。

仁はほんの少しの逡巡を経て、この彼にとつて得しかない申し出を受け入れた。スムーズな契約成立は、私の気分をとても良くした。さあ、最初は何をしようかな、と考える。どこへ行こう。そうだ、青山ブックセンターに本を買いに行こう。そのあと、服も買いに行こう。次の週末に。私は何も考えずにこの春を謳歌すればいいのだ。

金曜の夜に仁に電話をした。アルバイト先の人達と飲み会の最中だったらしく、「明日昼から空いてる？」と聞くと、飲み会がオールだったら三時くらいかな、と答えてきたので、その時間に渋谷で待ち合わせることにした。案の定、渋谷ハチ公口で待ち合わせた仁の顔は青白く、明らかな二日酔いの表情だった。猫毛の髪はとれかけたパーマが弱弱しくうなだれていて、いかにもだるそうな表情の仁を引き連れ、宮益坂を上り青山ブックセンターに向かった。昔から本の大人買い、というやつを実行してみたかったのだ。「どこ向かってんの、これ？」と聞かれ「本屋」と答えると、仁は「俺は暇だな」とぶつくさ言った。「本屋で暇な人なんていないよ」「俺は本なんて読まねえから」「ほんとに全然読まないの？」「司馬遼太郎くらいなら読んだことあるけど」「なんだ、十分読書家じゃん」「青井か平井に勧められたんだよ」なるほど、そこらへんが勧めそうな本だ。

変に納得しながら、国連大学の脇の道を奥に入ってエスカレーターを降り、地下の吹き抜けのフロアに面している青山ブックセンターに着いた。私はしばらく仁の存在を忘れて本漁りに夢中になった。前から欲しかったゴッホとラファエル前派の画集、ウィリアム・フォークナーとスコット・フィッツジェラルドの原書を買った。これらの本を全て持って帰るのは重すぎるので、カウンターで自宅に送ってもらう手配をした。なんていう贅沢。支払を終えて仁を探すと雑誌コーナーで立ち読みをしていた。まだ五時を過ぎたばかりで、ご飯を食べるにも早いので、近くのカフェでお茶することにして本屋を出た。キャットストリート沿いのカフェでお茶していると、全く普通のデートといった観が拭えなかった。だが、私と仁との間を流れる空気はこれ以上ないほどドライなものだった。仁はガラス窓越しにずっと外を見ていて、道行く女の子の品定めを延々としていた。「あれは顔は可愛いけど、足が太すぎるな。あの子は、俺は好きじゃない。でもまあ、やれるといえはやれるな。あれはクソだ。ああいう、ブスのくせにいきがってる女は死んだほうがいい」とかなんとか。かといって私も彼に習って男の品定めをするわけにもいかず、しかも私自身も道行く男の子より女の子を見るほうが好きなので、仁の批評に口を挟んで暇な時間を潰していた。そうしていると、この「女の品定め」という行為が何か意義深く重要な私達に与えられた使命のような気がしてきた。次々と通り過ぎていく女の子たちを見ては、「あれはどう？」「私、あの子は可愛いと思う」「あれが可愛いのか？ ウソ、胸がデカイだけじゃないのか？」とか受け答えしながら、予想以上に盛り上がる。勿論、こんなものは普通の男女の会話ではない。けれども確実にそれを楽しんでいる私があった。仁の趣味はあまりに普通の男の子の範疇を出ていなくて少しうんざりしたけれど。目が大きくて、鼻筋が通って

いて、スタイルが良くて色気がある。大抵の男が可愛いと迷わずに言えるような女達。でも私は、あまりそういう女の子には魅力を感じない。流行の化粧・服装を迷わず選んで、当然ながら同じような外見になっていき個性を失っていく雑誌モデルの模造品のような女の子たちではなく、私が好きなのは、すらりとした涼しげな雰囲気、砂浜を歩いても足跡が残らないような清い軽やかな感じを与える人だ。けれど、タマにそういう人が通って私が絶賛しても、仁は余り興味を示さない。仁がそういうときに吐く批判的なセリフは決まって「エロさがない」だった。仁は本能の塊でしかないのだ。

さんざん道行く女の子達の批評眼を養った後、私達は渋谷に戻り、東急ハンズの裏手にあるカフェレストランでご飯を食べた。私はサーモンクリームパスタ、仁は竜田井を、私はカクテルを一杯飲んだだけだったが、仁はビールを三杯も飲んだ。こんなに長い時間一緒にいると、さすがに話題も尽きるかと思われたが、仁は意外に人を飽きさせない人間で、私を心地良くさせるようなことは何一つ言わないのに、愉快的気分させるのはとても上手かった。よく電話で話をしていた時のように、彼はいくらでも下らない話題を引き出すことができた。そのお陰で全く退屈しませんでしたのだが、大抵話の内容は下ネタだった。ただ酒が入っていけば、下ネタほど面白いものはない。すっかり気分が良くなった私は、夕飯を食べたら今日は帰ろうと思っていたが、もう少し外にいたくなかった。それでお店を出た後、仁を連れて代々木公園へと散歩にむかった。晩春の代々木公園。井の頭公園ほどに思い出のある場所ではないが、とにかく緑の息づいている場所、無機質なフェスタを日々繰り広げる夜の街とは対照的な、何かしらの生きている者たちがささやかに無数に呼吸をしている区切られた空間は魅力的だった。私は、電灯に照らされた若葉の緑が、夜空の群青を背景に透けて輝いている光景が、世界で最も美しいものの一つだと思う。そんな並木の葉の輝きを見上げながら、抜けきらない酒の酔いに任せて、私はくるくると回転しながら歩いていた。回りながら私は、仁という存在を忘れていた。でも、本当は忘れてはいなかった。仁が何も言わず、私の存在など無視しきって何の気なしに煙草を吸いながら、たらたらと完全なる彼の歩調で歩いていることが私を世界に結びつけ安心感を与えていたのだ。こんな風に書けば仁に恋をしていたみたいだが、それは絶対にあり得ないことだ、というのも何か不思議な事実だった。

森の中の道を歩いて、辿り着いた大きな池のほとりのベンチに私たちは座った。というより、ふと後ろを振り向くと仁が疲れたらしく何も言わずにベンチに座っていたから私も座ったのだった。昼は大きな水しぶきをあげる噴水は今止まっていて、静かな水面にあ

めんぼが小さなさざ波を無数に生み出しては消していくという反復運動によるインスタレーションを作り出していた。公園の周囲の都会の騒音こそ聞こえないものの、生きる物たちがたてる音がひしめいていて、草の匂いのする空気を圧迫していた。植物、土、動物、虫、水、水の中の生物、視界に一度に入ってくる色彩と形よりも、きつと一度に耳から入ってくる音の種類のほうが多いのかもしれない。この小さな自然の奏でる音のオーケストラに比べれば、私と仁という人間の作り出す音などまさに「微か」なものに違いなかった。仁はひたすら黙ってたまに煙草を吸っていた。私は今まで書き連ねたようなことを、まさに徒然なるままに、ぼんやりと考え続けていた。

代々木公園でしばらくお互いに瞑想を楽しんだ後、仁には地元の友達からお呼びがかかり、私たちはまた渋谷駅まで引き返して行って、そこで別れた。別れる時に財布から一万円札を取り出し、仁に支払った。仁は当たり前のようにそれを受け取ると、几帳面に四つ折りにしてそのままズボンの後ろポケットに入れ、「じゃあな」と言って軽く手を振り、JR渋谷駅の改札へと消えて切った。援助交際、というものはこんな風に行われるものなのか、少しだけ周囲の視線に敏感になった自分を感じたが、余りに自然な流れだったので、端から見ればそれは、彼氏に借りていたお金を返す女の子の姿にしか見えなかったろう、と自分を納得させた。それにしても、こうして暇な時間を潰すことが出来る良い相手、恋人でもなく友人でもない、互いの意思に全く構うことなく一緒にいられる気楽な人間と時間を過ごすことは、それ自体は余りに無為な行為だと理屈では分かるのだが、とても楽しかった。春を買う、ということつまり「買春」はそもそも理屈で割り切ることなどできない人間の根源的な快楽を金で買う、ということだ。私は、もう十分に感情的に満足だったので、その後は他に誰とも連絡をとることなく家に戻った。

そうこうしているうちに季節は、いつもと変わらず無常に移り過ぎていった。あれほど私の心をざわめかせた春はその盛りを超えて、初夏という一層美しい季節へと変化を遂げていた。五月には、お祭りのように休日を連ねるゴールデンウィークというものがある。けれどもこの期間の街中の混雑具合に辟易する私は敢えてここにアルバイトのシフトを集中させて、特に仁とどこかへ行くという予定は入れなかった。ただ、ゴールデンウィーク明けの週は、いつもなら水曜にあるゼミが、教授が学会発表で出張に行くとのことで休講になったので、ふと思えば立ち京都へ旅行に行くことにした。京都には立命館大学に通う、やはり高校時代の同級生のネコという友人がいる。彼のおかげで、この数年は京都に何度も格安旅行をさせてもらっていた。ネコがいるので無理に仁を連れていく必要はなかった

が、仁が京都の街でどんな反応を示すかに純粋な興味を感じて、私は結局仁を京都旅行に連れていくことにした。仁は最近旅行に行っていないかったという事で、二つ返事でOKを出した。新幹線代を出すのは私なのだから、ずいぶん気楽なものだ。

ゴールデンウィークを過ぎた平日の品川駅新幹線下り方面プラットフォームは、閑散としていた。新しく近未来的で清潔感のある品川駅の新幹線乗り場が好きな私は、久々の京都旅行への期待感と共にワクワクする気持ちを抑えきれず浮足立っていた。仁も落ち着きなく、トイレに行ったり駅弁を買ったり喫煙コーナーに行ったりして、うろうろしていた。

「仁は京都に行ったことある？」

「中学の卒業旅行以来だね」

数少ない会話はそこで途切れ、仁はまたそそくさと喫煙コーナーに向かった。

新幹線に乗り込むと、仁は窓際の席をぶんどって、すぐに眠りに入ってしまった。男としてあるまじき行為だとも思われたが、旅路を読書に費やそうと思っていた私にはかえって好都合だった。

小田原、熱海を通過し、静岡の茶畑がえんえん広がる風景も通り越し、天竜川を越え、浜名湖を通り越し、名古屋を通過して、十二時半に京都についた。あの壮大な京都駅の構内に入っていくと、古都に戻ってきた、という感じを受ける。ホームに入る前に車窓から見えた東寺の境内から溢れ出る新緑の若緑色に、青葉の京都に来た悦びを文字通り肌で感じ、そわそわしながらホームに降り立った。

ネコは、在来線のホームで待っていた。ネコの家は二条駅から五分ほどの所にあるので、京都観光の拠点としてはとても便利だった。ネコも同じく高校の同級生ではあったがクラスが一緒になったことのない仁とは高校卒業以来の再会だったらしく、二人は握手をして再会を喜び合っていた。ネコという人間は、そのあだ名通り、漂々とした無頓着な穏やかな白い家猫のような人間で、大抵どんな種類の人も簡単にコミュニケーションがとれるのだった。

私達は、ネコの家に荷物を置くと早速、京福電鉄いわゆる嵐電の西大路三条駅から嵐山へとむかった。連休明けの嵐山はほどよく観光客が行き来していて、私達もまたその風景の一部と化して、「美しい日本の原風景」に溶け込んでいた。悠々然とした山々を前に桂川にかかる渡月橋は場違いなほど幾何学的に直線のフォルムを保っていて、その信じ難いほど美しい名にも関わらず私はいつも少し興ざめがした。「日本で最も美しい風景」という刷

り込みがあるからこそ、有難いものに思っているような気がしてならないのだ。駅から続く道が橋へと導くままに私達は渡月橋を渡って、向こう岸の土手へと下って行った。白石で舗装された土手に座っていると仁が、「多摩川と大して変ねえな」といった。それには私も同意だった。ただ、多摩川よりも河川敷は狭く、様々な緑のヴァリエーションに塗りたくられた山々に囲まれる景観にも関わらず人通りが多く活気ある観光地特有の単なる田舎の牧歌的風景とは異なる雰囲気、遙か昔からこの場所が人々を魅了し集わせてきたという土地そのものにある古びたプライドを窺わせた。つまりはそれが古都だった。

それからお決まりのコースで天竜寺の美しいが極めて人工的な、白い敷石のイメージをいつまでも視界の片隅に残すような広い敷地をめぐり、竹林の間の道をしばらく散策した後、金閣寺方面に向かうことにした。しかし、私が行きたいのはあの土産品の拡大物ではないような金閣寺などではなく、金閣寺方面に向かうバスで千本北大路まで行き、バス停を降りて十五分ほど歩いた所にある光悦寺だった。

江戸時代のマルチクリエーターと言われる本阿弥光悦が居住地とした鷹が峯に残る、光悦の菩提寺であるこの寺には、前の年の夏にゼミ合宿で一度訪れていた。その時に、他の寺社にはない素朴さと圧倒的な自然美に魅了されて、京都に来たら必ず行きたいと思うようになった。特に庭園から見渡す鷹峯連山の雄大な景色は、月並みだが心が洗われるとしか言いようのない光景で、若緑の美しい季節にどうしてもその姿を見たいという思いにかかれて今回の旅を決行したようなものだった。バス停からは車道沿いにガードレールなど無い狭い歩道をひたすら歩くのだが、五月の昼下がりの陽光は思ったよりも強烈で、仁は何度となく「暑いな。あとどれくらい？」と聞いてきた。「多分あと少し」と適当にはぐらかしながら、ようやく突き当たりで左に曲がると突然京都らしい緑多い寺町が現れた。闇の奥に新緑が魅惑的に輝く手前の源光庵を素通りし、左手に光悦寺の参道入り口が静かに境内へ誘う目的地へと辿り着いた。簡素で小粋な竹の門をくぐり、苔むした飛び石づくたいに敷地の奥へと行くと有名な光悦垣の前に出た。無数の光を宿した若緑の楓の木々に覆われ、さらにその背後に緩やかな稜線の山並みを控えて竹垣は盛夏とも紅葉の時期とも違った佇まいを見せていた。地を覆う苔は楓の若葉と同じ新緑の色で上下を同色系に挟まれて、竹垣すらも若葉色に染まっているように見えた。一心不乱にその様を目に焼き付けようといつまでもその場に立ち止まって光悦垣の姿に見とれ、何枚も写真を撮る私を仁は異常だと思ったらしい。「お前、こんな薄汚い垣根の何がそんなに気に入ったの？」あきれ返ったような声が響き、その時ばかりは私は仁をこの旅に誘ったことを後悔した。当然な

がら仁は、自然や芸術といった分野には全く興味がないのだ。一方、そういった分野に少なからず興味を持ち知識もあるネコは、「ここ初めて来たけどいいね」というフォローの言葉をさりげなく口にするので、この場の雰囲気調整する中道的役割を担ってくれていた。

まさに旅のクライマックスとなる庭園での鷹峯連山の風景も仁にとつては何でもない田舎の景色に過ぎないようだった。「こんな景色、おやじの実家の庭から見えるのと何の変わりがあるんだよ」という意見は、全てを肯定することはできないにしても、やはり、ここにはほんの少しの事実があることも認めざるを得なかった。それでも私は変わりなく、この景色に心酔し昨年よりも時期が早いために緑の鮮やかさが目立つ山々の姿に見とれた。そして何枚か写真を撮った後、そろそろ限界の様子を呈してきた仁とネコとともに寺を後にした。

夜は、賀茂川沿いの串カツ屋で夕飯を食べた。出たばかりの川床の席が運良く空いていたので、そこに座って私達は串カツと酒を楽しんだ。賀茂川の空気と、行き交う人々と、夜の街の賑やかな感じとが相まって、ここには絶妙な古き良き街の空気があった。私はそれに浸りきった。仁も満足げな様子で、しきりに「京都わるくねえな」とネコに向かって言っていた。

その後は、四条から地下鉄で二条に戻り、ネコの家で軽く飲み直しをした。コンビニで買った缶ビールやらチューハイやらでぐだぐだと酒盛りをしていると、小一時間ほど経った頃、ネコの彼女からネコに連絡が入った。それは、彼女の家にごきぶりが出た、という報告だった。ごきぶりが出たくらいで騒ぐな、という同一見解を仁と私とが酔いに任せて捲し立てる中、心優しいネコは「でも彼女が困ってるから、とにかく行ってくるよ」と夜中の十二時半に家を出た。

その後、黙って酒を飲みかわしていた私達の間には、すでに通常とは違う空気が流れていた。それに気がついて避けよう避けようと焦る気持ちだが、酒で弱められた理性の働きによつて強められることはなかった。仁はそういう場面でも巧みに振る舞うことのできる男だった。それは自分の欲望に誰よりも忠実な仁らしい知恵だと思われた。仁は少しずつ近づいてきて、私の肩を抱くと自分のほうに引き寄せて最初は服の上から、さらにはTシャツの裾から手を入れて胸を触った。さらにキスをしたのだが、ついに唇にだけは触れなかった。耳の後ろとか、首とかに執拗に唇を吸いつけられた。彼の肌は女の子のように柔らかく温かかった。そしてその痩せた体にも関わらず二の腕の筋肉には男性的な力が感



じられて、この男は体重は私とそんなに変わらなくてもきつと私を簡単に持ち上げられるに違いない、ととっさに思った。そう思った時、私は自ら自分の欲望を掻き立てようとしていたのか、それとも本当にそう感じてしまったのか定かではない。でも、私は何のためらいもなく自分がその時仁とそういうことをしたいと思っていなかったと、これは法廷でも証言できると思う。それくらい、私は彼を拒んでいた。セックスだけは頑なに拒む私を抱くのを、最終的に彼が諦めたのは三十分後くらいだった。仁は私から離れると、完全にやる気を喪失したらしく酒の抜けた顔で換気扇の下で煙草を吸っていた。明らかに不機嫌そうな態度の仁を前に、私もまた酒が抜けきつたのを感じた。私はなすすべもなく仁に謝った。そして「私はこういうことがしたくてお金を出してるわけじゃないから。こういうことはしないでおきたいの」と言った。仁は黙っていたが、一分後くらいに「あんなの酒が入れば当然の流れでしょ。金出して貰ってるからサービスとかは考えてねえし」と言った。そして帰らぬネコの布団を占領して寝てしまった。

仁とセックスしなかったのは、全く濡れなかったから、というのが実のところとも言える。その時私は、恐怖心すら抱いていた。それは、墮落への恐怖かもしれないし、またセックスへの恐怖かもしれない。それは親族と性的関係をもてないように、自分と同じような人間とはできない、という本能的な嫌悪感かもしれない。とにかく私は仁とはセックスできなかった。それはなんでだったのでしょうか？

しかし、そんなことがあっても私達の関係が一晩で決定的に変わるようなことはなかった。翌朝起きると、いつの間にもやら帰ってきていたネコは、私達より早く起きて朝食の用意を始めてくれていた。こういう男は結婚するのに良いだろうなと考えながら、まだ寝ている仁が彼の布団を奪ってしまったことを、代わりにネコに謝った。ネコは笑いながら「いやいや、俺が帰ってくるのが遅かったんだから全然いいよ」と言った。「何時に帰ってきたの？」「四時」それが本当にごきぶりだけと格闘していた数時間だったのか、彼女の不満を満たすための時間が含まれていたのかは分からないが、とにかく私と仁との間にひと悶着あった時間帯に彼が帰ってこなかったのは幸いだった。ようやく起きてきた仁は、寝起きのいかにも低血圧な白い顔に特別な表情を全く浮かべることなく、ネコの作った目玉焼きとお味噌汁の朝ごはんをもぐもぐ食べていた。その姿を見て私は、昨日のあの数十分が仁の中で完全に無かったものとなっているのを感じた。仁にとってはあんな行為は日常の反復動作にすぎないのだろう。酔っ払って、女が横にいる。好みのタイプであろうとなかろうと、そのときはただ女に手を出すしかない。それが仁なのだ。

東京行きの新幹線を京都駅のホームで待っている時、私はデジャ・ヴュに襲われた。そしてすぐに、それがあの春先に見た夢のせいだということに気がついた。奈々子が青井君と結婚する、と私に一方的に宣告するあの夢だ。このデジャ・ヴュは私の心にまたネガティブな色彩を落としてきた。それは藍色と濃い紫色の中間のような色だと思われた。ふと青井君たちの結婚のことを仁が知っているか気になって、私はそれを仁に尋ねた。仁は何食わぬ顔で「ああ、そうらしいね」と言った。彼の表情はそれによって何一つ変わらなかった。私は、その質問をした時、少し残酷なカマをかけたつもりだった。なぜなら、敏子と仁は高校生の時にしばらく付き合っていた時期があったから。敏子と仁は高校生にありがちな淡い恋愛をして三カ月くらいで終わってしまった。けれど、その後仁は「おかしくなった」。敏子と青井君が付き合ったのは、その半年以上後だから、仁と青井君の間がそれによっておかしくなるようなことはなかったのだけれど、仁はその頃何を思っていたのだろう。あからさまに「すれていく」仁の姿をその頃私達は見ていた。それは敏子のせいだけではなかったのだろうけれど、全く無関係だったわけでもないのだろう。仁もまた、敏子に対して追いつけない春の圧倒的な輝きを見て、萎縮してしまったのだろうか。仁にはどこか、何かに一度大きく絶望した人、という雰囲気があった。もし、仁の中に私と同じ春への劣等感があるのなら、「春生まれ」の仁が置かれている状況は私より遥かに悲惨とは言えないだろうか。自分もその中に含まれているはずのものに対して抱く疎外感、それは追い出されて二度と戻ることのできない故郷への愛情と表裏一体の憎しみへと通じる。新幹線の隣の座席でずいぶんのききな顔で熟睡している仁の寝顔を見ると、そんな凄惨さはどこにも窺われなかったけれども。

新幹線の中で、いつの間にか私も寝ていた。そしてまた夢を見た。その夢の中で私は、高野先生に会った。この事実は醒めてからの私をしばらく脅かしていた。高野先生。華奢で知的美人といった印象を与えるシャープな顔と体つき、短髪の黒髪で、いつも白いブラウスに黒のパンツという格好だった。大学卒業後、どこかの大手企業で女性営業マンとしてバリバリ働いていた経歴をもつ異色の先生だったが、利益追求型の企業での労働よりも、もっと直接的な社会貢献を求めて、正反対とも言える教職の道に入ってきたという話だった。体は若木のように細くて、短い髪と相まって後ろ姿は少年のようだった。化粧つきの肌は、そばかすは目立つものの白くて綺麗で、実年齢は四十年代半ばらしかったが、三十代前半にしか見えなかった。結婚はしていたが子どもがおらず、その分、自分の生徒達に文字通り全力の愛情を注いでいることは明らかだった。少し感情的過ぎ、涙もろいところ

ろがあつて、その「熱さ」を敬遠する者もいたが、彼女のバイタリテイと生徒への理解力に匹敵する魅力を持った先生は皆無だった。そう、先生もまた春のような人だった。見た目は正反対と言つていいほど違う二人だったが、先生と片島敏子にはどこかしら共通点があった。他人に与える安心感、しなやかで華やかな印象。だんだん二人をそっくりだという人が増えていった。事実、敏子は誰よりも先生になついていたし、先生もまた敏子は特に信頼し可愛がつているようだった。それでなのか、敏子に感じた引け目に似た感情を、私は先生に対しても覚えていて、皆と同じように先生に心酔することができずにいた。仁ですら「高野は、数少ないまともな先生だ」と言つていたらしい。先生の全て見透かすような涼しい目と、時折語りかけてくる言葉の、私の心の本質をつくような鋭さに対し、私は恐れに近いものを感じていた。夢の中で先生は、私の祖母の家で授業、というより生徒達の人生相談に乗つていた。夢のあの混乱した舞台設定上、なぜ私の祖母の家が高校の校舎になつていたのだ。玄関のドアがあげ放されて、まさに教室のようになって居間には、廊下から入れ替わり立ち替わり様々な生徒達がやってきて、その中には記憶こそ曖昧だが、仁も青井君も平井もいたはずだ。私はなぜか、トイレでその順番を待つていた。そして夢のなかの勘で自分の順を察知してトイレから出ると、先生がカウンセリングを行つている居間に入った。先生は祖母の家の居間そのままの炬燵に座つて、いつも通り姿勢の正しさを保ちながら、にこやかに歯切れよく勢いある口調で、「長沢のご家族はお元気？ 特にお変りはない？」と聞いてきた。その瞬間に私はびくつとなつて「はあ、まあ」とか何とか曖昧に答えていた。すると先生は急にまじめな顔つきになり、「長沢、悩みがあつたら先生にでも、周りの友達にでも素直に相談するといひよ。あんたは頭が良くて、根が真面目だから、全部自分で背負い込もうとするけど、もつと自分が辛いと思つてることを素直に受け止めて、吐き出すようにしたほうがいいよ。そのほうが早く前に進める」と真剣な口調で言い出した。私は先生の刺すような視線に耐えられず、そっぽを向いた。ただ、そっぽを向きながらも先生がとても悲しい顔をしているのを、夢の不思議さではつきりと感じ取つているのだった。先生の悲しみは本物だった。それが伝わってきて私も泣きそうだった。でも羞恥心からか必死に涙をこらえていた。心の中では、ここで心を許すもんか、という想いと、自分の中の葛藤を先生に全てぶちまけて許してもらい受け入れて欲しい、という二つの相反する想いがぶつかつていた。けれども結局私は自分自身のごみのようなブライドからくる羞恥心に負けて、そっぽを向いたまま立ち上がった。そして最後まで先生の顔を見ずに居間を出た……その後すぐに場面が切り替わり、記憶もそこで途切られてし

まった。起きると新幹線は新横浜に到着したところだった。この夢のお陰で、品川駅から自分の家に帰る間も、何となく心が沈んでいた。仁とは山手線の渋谷駅で別れた。

季節は六月、梅雨へと移っていった。

いい加減に卒論と、院試の勉強もしなくてはいけないと思いつつもなかなか手をつけられないでいる私は、毎週末を美術館めぐりかギャラリーめぐりに費やしていた。大抵は仁を引き連れて。

いかにも梅雨らしい、細かな雨が果てるともなく降り続く六月初旬のある日、私はムンクの回顧展に仁を連れていった。上野の国立西洋美術館だったが、平日だったのでそれほど混雑はしていなかった。仁は全く絵に興味を持っていないので、行くまでは文句しか言わないが、不思議なことに実際に絵を見始めると、普通に一枚一枚を興味深げに見る。特に男女が怪しく交わっているような絵の前には長時間立ち止まる傾向があり、しかも私に変な目くばせをしてくるのが鬱陶しくもあり、またユーモラスでもあった。ともあれ私にとっては、好き勝手に行動する彼の癖が美術館ほど有効的に活かされる場所はなかった。じっくり二時間はかけて一つの展覧会を見る私よりも、いつも遙かに早く見終える彼は、さっさと会場を出て煙草を吸うなり、酒を飲むなり好きなようにしてくれているので、私は全く孤独ではなく自分のペースで絵を見られるのだった。仁のことを美術館への同伴者として、これほど適した能力をもった人間はいないのではないかとさえ、私は考えるようになった。

仁ではないが、展覧会に行くと何枚かは、他の絵よりずっと長い時間その前に立ち止まってしまう絵がある。絵は、一枚のキャンバスに描かれた短編小説のようなものだ。その前に立ち止まって、じっくり読みたくなる小説が、この展覧会では三編ほどあった。一つは「声」と題された、暗い夜の森を背景にこちらを向いて立つ一人の髪の長い女を描いた絵だった。森の奥には湖があつて、湖面には丸い大きな満月が映り、その光が長く尾を引いて水の上に月の道を作っていた。月の光は明るいのに、女の顔は暗くぼんやりとしていて、キスでもしようとするかのように心持あげた顔をこちらに向けている。キスしようとしているのか、何かを伝えようとしているのか。いずれにせよ暗い情念を秘めてこちらを向いている女ののだろうか。いや、それとも彼女を見ているこちら側の目に、「暗い情念」が宿っているだけなのだろうか。「声」という題を最後に見て私は唸りたい衝動にかられた。なんて絶妙な題なのだろう。彼女は、何かを語りかけているのだ。でも、その声は私には聞こえなかった。

もう一枚はさらに深刻で、「ゴルゴタ」という題からしてすでにそうなのだが、その通常の宗教画とは似ても似つかないような、軽々しさにまずは驚いて足を止めた。キリストの顔が「へのへのもへじ」よりさらに簡素なまさに「点と線」のみで描かれていて、その人を小馬鹿にしたような顔に、純粹に衝撃を受けた。さらにその周りに描かれた群衆。皆いかにもムンクらしい暗いおどろおどろしい人々の姿で、ただ、彼らの方が、キリストよりはまだ人間らしく描かれているのだった。これは何だろう、と私は絵の前で考えた。考えざるを得なかったのだ。しばらくして、画面上の構成のある不思議な効果に気がついた。描かれた群衆には何か秘められたパワーのようなものが感じられたのだが、その群衆の暗い強いどこか地の底から湧いてくるような力の中心点、まさに台風のような場所にキリストがいるのだった。群衆は、キリストから生まれているのだ。群衆の中心にキリストがいる。そして、キリストからその群衆、その人間の根源的な暗い力が生まれ出ている。そんな考えに突き当たると、ふと寒気に襲われた。恐ろしい絵の前に今、私は立っている。そう思うと自然と足は次の絵の前に向かっていた。

最後に私の足を止めた絵は、「太陽」の絵だった。それはこれまでのムンクの作風とは違って変った大規模なキャンパスいっぱい描かれた異様に明るいパステル色の光を八方に放つ、水平線の彼方、美しい海のむこうに上る輝く太陽の絵だった。その絵の軽薄に近い明るさに、私の足は止まらざるを得なかった。これまで散々、愛や死を悲観的に捉えて、暗い情念の世界を描いてきた彼が、どこでその世界を裏切って、あちら側の世界に行ってしまったのか。私は、その絵の前でムンクに裏切られたように感じた。というよりは、何か興ざめのした感があった。それは、渡月橋に対して感じた興ざめに少し似ていた。

展覧会を見終わった後、足休めにお茶をしていると仁が、「お前は変な絵の前で立ち止まるな」と言ってきた。私がムンクのキリストの絵の前で長時間立ち止まっていたのに気がついたらしい。続いて、「お前はクリスマスチャンか？」という質問を受けた。違うので、それは否定しながら、あの絵からはこういうことが読み取れるのだ、という話をする、「ふーん、そうなのか」と無関心に答えたものの、他に何点か覚えていた絵をあげて、「あの意味はなんだ？」と聞いてきた。聞かれたので説明していると、「お前と話しているとインテリになっちまいそうだな」と急に顔をしかめてきた。さすがに腹が立ったので黙っていると、にやにやし始めるので、うまく掌で転がされているような気がして「もう帰ろうか」というと、「晩飯は？」。今日は金を出すのが嫌だったので、「今日は家で作ろうかな」「じゃあ、お前んち行くわ」「別に今日はいいいよ」「何で？ 今日サービスしますよ」。何か

嫌な予感がしたが、仕方なく仁を家に連れて帰ってきた。最近、仁はテレビゲームを我が家に設置させて、暇つぶしをしている。こんな半同棲的生活は、面白くないことはないが、何か疑似恋愛的すぎて、すっきりとしなかった。

東京に帰ってきてから、私と仁との間を流れる空気の質が少しずつ変わってきていた。京都のネコの家で仁とのセックスを拒んだことは、何故か決定的に「拒んだ」ということにはならなかったらしい。むしろ、その可能性を残してしまった、という感じが色濃かった。事実、たまに私の家に仁が来る時、彼に「直前」まで許すことが何度か起きた。だがセックスに踏み切れることは、どうしてもできないでいた。

結局この日も、仁は私の作った夕飯のハンバーグを食べたあと、インターネットで卒論の資料リサーチをしている私を横目にテレビゲームに興じ、挙句に終電が無くなったと言って泊まると言いだし、先に私のベッドに入りこんでしまった。仕方無くベッドに入ると、胸を触るのは当然のこと、足を絡ませてきたり、下半身に手を伸ばしてくるなど危険な行為に及んでくるのはもういつもの通りだった。だが、私は自分の手をつかまされると、必ず振り切って背中を彼に向けて頑なに腕組みをして眠るようにしていた。大抵そうして寝た夜は、仁や青井君が現れる性的で不気味な夢を見て、とてつもなく暗い気持ちで目を覚ますのだった。それが、たとえば生理前などで、もう完全に感情的にも肉体的にも受け付けないような時は、通常の支払にタクシー代を加えた金を渡して夜中の何時であろうと仁を家に帰した。そうしながら何度となく、こんな「ひも」そのもののような関係ならば、いっそのこと肉体関係をさっさと結んだほうがいいのではないか、という風にも考えた。

仁との関係がややこしくなってくる一方で、梅雨と言う季節はいつまでもだらだらとその鬱陶しい湿っぽい日々を進行させていった。それに合わせるように頹廃的なノスタルジィが、黴のように私の日々を支配するようになっていた。私は、熟しきって腐った、思い出という果実にあたって死ぬのかもしれない。そんな馬鹿なことを考えながらも、感情が腐っていくのが分かるから、せめて頭だけでも明晰にしておきたいと思つて昼休みには図書館に一人こもつて勉強したりしていた。けれども研究に精を出して、充実したときを過ぎても、「二人の時間」というのは、それはそれで人間らしい感情に閉塞感をもたらすもので、つまり、それは「寂しさ」という奴なのだが、とにかくその「寂しさ」に耐えられなくなつて、やはり私は頻繁に仁に連絡をした。仁と下北沢の飲み屋で、一緒に飲み食いをしてから、私の家へ行く。仁は特に酒が入ると、「べたべた」してくる。そろそろやつてもいいか、と思つても、それを許してしまつたら、この今の「ぬるま湯」的關係が破綻を

きたす気がして、セックスだけは頑なに拒み続けた。つまりはその繰り返しだった。これでセックスしてしまつたら、それこそただの「ひも生活」じゃないか。それは確かに文字通りの「買春」だ。この事実には思い当ると私は鳥肌が立つのを感じた。春には、これ以上ないほど猥雑な意味があるのだ。ただ、春を見返したかっただけなのに、これはある意味「春」からの仕返しとも言えた。でもそんなただの言葉遊びだ。つきつめて自分の心を見つめてみると、仁とセックスするのが、実は怖いのもかもしれないとたまに思う。仁と寝たら仁を好きになるのじゃないか、ということが怖いのだろうか。でも、どうして好きになるのが怖いのか？ 仁は私だ。私が、私を好きになってどうする。同じように春に生理的な嫌悪を感じる、春という完璧な存在から弾かれる運命にある二つの憐れむべき存在が、慰め合いよろしく抱き合っている場面なんて、くだらなすぎて想像もしたくない。

それにしても仁は無頓着だった。彼は最終的に、というか恒常的に、私と寝ようが寝まいがどうでもいいのだ。たとえ、私が彼と寝たとしても、彼にとっては数多くのベッドを共にした女の一人になるだけなのだ。もし私が仁を本当に好きだったら、そんな事実には耐え切れないだろう。けれど私が気にするのはそんなことではなかった。私が気にするのは、私自身の感情に纏わることだけだ。仁と寝ることは、私の内部にある大切な何かを失わせるきっかけになるだろう。それは何か？ 処女でもない私が頑なに守ろうとしているものは何なのか？ また、夢がそれを教えてくれるのか？

六月半ばのある朝、私はまた「悪夢」を見た。それは仁に関係するものだった。

仁は私の夢の中で、男に体を売っていた。

私とその衝撃的な映像を夢の中で見たとは思えないが、とにかく、夢の中の「事実」はそうなっていた。はつきりと記憶にあるのは、それを私に対して認めたときの仁の表情だ。彼は、全くいつもと変わりない「無頓着」な表情で、「それ」を認めた。「簡単に金を稼ぐには、あれしかないんだよ」とか、そんなことを言っていた。その「無頓着」さが、何にも増して私の心を冷やした。それはもう治らない重い病を患ってしまった人に対して感じる無力感に似ていた。

夢から覚めた時、私は奈々子と青井君の夢を見たとき以来のはつきりと醒めた頭で、今見たものを「悪夢」と断定した。そして、そのことは後で私に重要なことを気付かせた。それは私が仁に抱き始めている一種特別な感情についてであり、その感情は恋愛感情なんて低俗なものではなく、本当の意味で友情に近い、むしろ家族愛、同胞愛に近いものだった。自分の一部のような存在が、痛ましい状況に平然と身をさらしているのを見るのは、

とても耐えられるものではなかったのだ……

ところでそのすぐ後に起きた出来事は、克明に記す必要がありそうだ。

平井から珍しく、二人でご飯を食べようという誘いが来て、断る理由もない私は何も考えずにこのこと出かけていき、渋谷で彼とご飯を食べた。仁といつか食べた店で。しかし、その中で平井は突然、まさに突然、復縁を迫ってきたのだ。これには私も驚いた。

平井は確かに最も微細な人の心の襞までも敏感に感じ取れるタイプの人間ではないのだが、決して他人の心を見抜く能力に欠けているわけではない。ただ人間感情のマイナス面に対する知識は圧倒的に不足している。それでも私は、彼と私との間にある決定的な差異を、彼自身も臆げながらも感じ取っているはずだと思っていたのだ。平井は私が驚きのあまりつい婉曲にできなかった素っ気ない拒絶の言葉に対し、腑に落ちない調子で言い出した。

「そうか。でも本当に俺達は無理なのかな？」

「無理でしょう。価値観が違いすぎるよ」

「お前の価値観で何？ 仁に金出して、一緒に遊ぶことか？ それは、お前に何かメリツトがあるのか？ もしお前がただ寂しいだけなら、俺がお前の恋人になるよ」

なんだそれ。私は心の中で驚愕した。とんでもない価値観だ。しかも、このロジックの無さはどうだろう。私は次第に募るイライラを抑えるのに精一杯だった。

「そんな理由で誰かの恋人になろうとするのは、おかしいんじゃない？」

「おかしい？ じゃあ、お前はおかしくないの？ 金を出して仁と付き合う。それが普通とは俺にはとても思えないよ。そもそも金を出して誰かと付き合うなんて、買春と一緒にやねえか」

(だから買春なんだよ)と私は心の中で密かに笑った。その笑いから生まれた余裕は少しイライラを抑制するのに役立って私はうっむき加減に彼の話を黙って聞いていた。

「俺はお前のことが好きだよ。お前は変わってるけど、他の人間にはない魅力を持ってもいる。自分ていうものがちゃんとある。だから俺はお前に憧れたんだよ」

そんな憧れ、必要ない。そのお前の感情が正しいからと言って、押し付けてくる傲慢さが私は嫌なのだ。

「仁にお金払ってるって、誰が言ってたの？」

「誰とは言わないけど、そういう噂を聞いたよ」

それは嬉しくない事実だ。さすがに、その噂は私にとって不利でしかないから。私はと



っさに嘘をついた。

「それは事実じゃないよ。なんでお金なんか払わないといけないのさ。私は仁と付き合ってるの。仁が好きだから」

平井はほんの少し驚いた表情を浮かべた。その驚きが、私の嘘を真に受けていることの何よりの証拠で私は彼のそんな迂闊さに対し心の中で舌を出した。

「そうなんだ。じゃあ、そんな噂たてられたら嫌だとは思うけど、噂がたつのは何か理由があるんだろうな。しかし、お前が仁を好きになるなんて、へえ。おもしろいな」

彼はそう言って何故かテーブルに肘をつき頬杖をついて考え込む様子になった。そして顔をあげた。彼の目は信じられないほど真っ直ぐに私の目にむかっていた。

「お前が仁を好きで、ちゃんと付き合ってるんだとしたら、俺が今日言ったことは忘れてくれ。俺は、悪くともないでほしいんだけど、別にお前を何としても仁から奪ってやろうとか考えたわけじゃないから。俺は、お前が仁とそんな馬鹿なことをしてるのが、残念というか心配で、ちよつと提案してみただけなんだ。お前にその気がないのは知ってるよ。でも、俺のことはないとしても、仁とは早く分かれた方がいいんじゃないかな。仁が根っから悪い奴じゃないのは俺も分かってるけど……」

そう言った後、平井は少しばかり逡巡した。言うべきか言わないでいるべきか迷っている表情だった。が、一瞬の後に彼は、得意の教師面を完全につくった。

「俺達は来年社会人になる、お前は大学院に行きたいらしいからまだ学生かもしれないけど、これまでとは環境も考え方も変わっていくだろう。そうなっても仁と一緒にいられるか？ お前は研究職、仁はフリーターのままで、それを格差という言葉で片付けるのは安易としても、もしお前が、仁をホントに真面目に好きでいて、自分なら仁に良い影響を与えていける、とか仁を変えられるか思ってるんなら、それは間違いだと思うよ。他人を変えられるなんて考えちゃいけないと俺は思う。俺がお前を変えられないように、お前も仁を変えることなんてできない。人を変えたいと思ったら、自分を変えないといけない。これは、俺が高野先生に言われた言葉だ。まあ、今でも百パーセント実行に移しているとは言えないけれど、少なくとも忘れてはいけない言葉だと思って肝に銘じてる。もし今、お前に嫌な思いをさせたなら謝る。でも頭の良いお前なら、俺が言葉にできてない部分も分かってもらえるだろうと思ってる」

平井の話は、それ自体はとても陳腐などうということもない説教だったが、一つの言葉だけは私には意外に響いた。平井は本当に、他人を変えることなどできない、という「こ

「ちらより」のペシミスティックな思想を信奉しようと思ったことがあるのだろうか。しかし、人を変えるにあたって自分を変える、なんて高尚なことを一体誰が実践できるのか。高野先生、平井、敏子、聖人たちはみなそんなことを言っていて、その言葉そのものが誰かを決定的に傷つけていることに気が付きもしない。ぶつくさ思いながら、しかし私は平井のその一つの言葉だけはなぜか、自分の中で消化できずにいた。私は仁を好きなんかでは全くなく、当然仁を変えよう、なんて目論見も全くない。なのに、一体何がこんなにひっかかるのか。その葛藤にはさらに不思議なことに私の心を少しだけ和らげる何かがあった。

平井と話をしながら思い出していたのは、平井と付き合っていたとても短い間のことと、そのきっかけとなった事件だった。ただ一度、仲睦まじかった私たちのクラスに暗い影が差したことがあった。それは敏子へのちよつとした嫌がらせの事件だった。敏子が学校祭の時に持ってきていたデジタルカメラの中に、本人は写していないものが映っていたのである。それは、黒板に書かれた「死ね」とか「メス豚」とかそういった類の言葉だった。敏子自身はそれを大ごとにはしないようにしていたが、当時、学級委員だった平井の耳に入ったことから高野先生に伝わり、お決まりの缶詰ホームルームとなってしまった。だが、さらに面倒なことに時のいじめ自殺の多発により、世間体を気にした学校はそれを一クラスの中で片づけることを許さなかった。ホームルームだけでは対応が甘いと考えたのか、私たちはクラス全員で音楽室に集められて、それぞれ一人ずつ、尋問のために隣の準備室に呼ばれた。その時、明らかに槍玉にあげられていたのは仁だった。ただし、高野先生は徹頭徹尾、仁を擁護した。しかし他の学年主任とか副担任とか教頭とかそういった連中は仁についての質問をあからさまに他のクラスメイトに投げかけ続けた。それに対し高野先生は、生徒への質問の場でも、それ以外の場でも「質問は全員に公平にするべきだ」と抗議を続けた。けれどもその抗議はひたすら無視されたのだった。

私はしかし、高野先生とこの状態を引き起こした平井に最後まで何かしら疑問をもっていた。敏子もまた少なからず憎らしく思った。仁を最後までかばい通した青井君にすら、多少の疑問を感じた。けれどもそれは恋心と表裏一体の嫉妬だったのかもしれない。平井の無駄な善人ぶりと、いざという時に生徒を救えない高野先生に対して、私のような無力感に似た怒りを感じていた人間は他にいなかったらう。奈々子も由子もその他有象無象、クラスの奴らは二人を褒め称えていたのだ。そして、肝心の仁に対しては皆、慎重論を張っていた。確かに、私たちの知っている仁は、そんなあほらしいことはやらない人間だっ

た。でも、敏子と別れた辺りから、学校外の悪い連中と付き合っていると、喧嘩したとか、先生に暴言を吐いて野球部をクビになったとか、そういった事実も含めた噂話の全てが彼に有利には働かなかった。それでも普段からよく知っている仁が、そんなことをすると思う？　そもそも、仁は学校祭のとき学校に来てなかったじゃん。私はその事件の間、終始イライラしていた。それでいて正面切ってはみんなに「仁じゃないでしょ」と言ってる。余りにも漂々としていた。ただ少しだけ学校に来る回数は減った。もともと段々余り学校に来なくなっていたので、気がつく人間はいなかったが。

後から、この事件の犯人は他のクラスの女子で、しかも狙われていたのは敏子ではなく、別の女子だった、ということが風の噂で広まった。みな示し合わせたように、「そもそも敏子がそんなことされるわけない」としたり顔で話し合っていた。仁には少しだけ好意的に皆が変わっただけで、特に謝罪もなし、そうこうしているうちに大多数がこの事件を忘れ去っていった。その直後、敏子と青井君は付き合いはじめた。私はそれを始めて知った時、むしろ知りかけた時に、その事実が避けがたいものとして自分の前に現れた時に、自分はきつと耐えられないだろう、ということに気がついた。平井から電話がかかってきて、私は誘われるまま彼と遊びに出掛けてそのまま付き合い合うことにした。この混乱の中で、当時の私にそれ以外の選択肢はなかった。平井は存在感と正義感が強すぎる所を除けば、体つきもすらりとしていて顔立ちも少し濃かったけれど、不細工でもなく、むしろ良い男だったので、好きなふりをするのは簡単だった。ある時平井は言った。「片島さんはずっと青井が好きだったんだよ」

私はその時、考えてはいけないことを考えていた。敏子がやったんだ、あんなの自作自演に決まってる。敏子がやっていけばよかったんだ。あれは、彼女が自分でやったんだ。自分で。そんな決定的な非でもなければ、私みたいな女、敏子に勝ち目があるわけない。なんで、やらないんだろう、どうして言い出さないんだろう。自分だって、人の悪口を言う、人を憎む、嫉妬する、自分だって十分汚い人間なんだと。その証拠に、仁はあんなに檻糞雑巾のようになって学校にだって来れなくなった。そんな不幸を尻目にお前らだけ幸せになりやがって。

案の定、平井と会ったその翌朝も、悪夢の名残をもって目が覚めた。朝一度起きて、テレビを点けたまま二度寝してしまうから悪いのだけれど、そのおかげで、耳から入ってくる強姦だとか殺人だとかのニュースが夢に反映されてしまったのだ。それは強姦魔が家に

押し入ってくる夢だった。最後まで犯されてはいけないけれど、そしてそこまではつきりと覚えてはいけないけれど、起きた時の後味の悪さはそれまでの様々な悪夢に比べても劣るものではなかった。嫌な気分のまま、トーストを焼きミルクティを入れて、それでもまだ果然とテレビを見ていた。不安を消す方法は、映像と音を流し続けることしかないのだ、一人暮らしの身としては。しかし、強姦も嫌だけれど、大量に人が亡くなる事件の報道はさらに嫌なものだ。地震にしてもテロにしても。うとうととして目を覚ますと、亡くなった人の数が増えている。無差別殺人にしてもそうだ。でも、もっと嫌なのは、そのあと何度と同じニュースが繰り返し返されて、犯人がまるで「自分たち」とは全く違う「特別な悪人」だと言わなければならないの論調が繰り返られることだ。したり顔のキャスターや論客たちの姿はいつもどこか、高野先生や、平井や、片島敏子といった面々の姿と重なった。彼らは巧妙に、槍玉が上がっている人間の側に立っているような事を言いながら、その実、自分達と「彼等」とは全く別の人種だということを前提に話をしているように私には思えた。「罪を憎んで人を憎まず」といったような徹底的な善人ぶりが、私は鳥肌が経つほど嫌だった。そんなことを考えながら、ふと自分を振り返り私はいつもの自己嫌悪に陥った。分かっているが、私は彼らを批判するけれど、彼らより善いものなんかでは全くない。彼らは、完全ではないが「善い」部分は確かに多く持っているのだろう。それに比べて私はどうだろう。ただ、彼らが「完全」でないのを重箱の隅かなんかみたいにつつついて、騒ぎ立てているだけだ。しかも私の心の中でだけ。だから、私は彼らよりもずっと低いところにいる。それは認めよう。その上で、やっぱり彼らに対して異議申し立てをするより仕方がないのだ。我ながら情けない存在だ。ただ、私に存在意義があるとすれば、彼らが完全な白だと言われる世界で、白でない人間がその存在意義を失っていくときに、そういった「完全でない人間」の側にたてるかもしれない、ということぐらいだろう。やつらが「善」の担当検事ならば、私は「反善」の担当弁護士だ。さようなら、愛なき世界。

この春は、こんなことは私の人生の中でかつてなかったことだが、移ろう季節たちが自分が消え去る前に断末魔の叫びを毎回私の心に響かせて、その痕跡をとどめようとしてくる。季節がものを語りかける。それも優しくではなく、怒鳴り散らして去っていく。信じ難いことが幾つも起きて私をおかしくしてしまいそうだ。その日、始めはメールで、その後平井から直接電話がかかってきて知らされた訃報。高野先生が死んだという訃報。それは、あまりに唐突で心臓を貫くような信じ難い言葉だった。でも、「青天の霹靂」とまでは言えなかった。四月、青井君の結婚の話を聞き、仁を花見に誘い、奇跡のような万馬券を

引き当て、仁を買って、やたらと高校時代の記憶に浸食される日々を送っていた私は、高野先生の死を、ほんの少しどこかで予感していたのかもしれない。それが馬鹿馬鹿しい考えだということは分かっている。けれど、それにしても、四月からの日記を読み返してもわかるように、今までのどの年にも増して、私は高野先生のことを最近思い出していたのだ。むしろ、その亡霊にいち早く追いついてもらっていた、としか考えられない。生霊というものがあるなら、こういう風に現れるのかもしれない。

そのメールは二限続きのゼミの休み時間に平井から届いた。それは一斉送信で当時のクラスメイト宛に送られていた。メールを読んで急に顔色が変わった私を、研究室にいた誰もが心配気に見てきた。思わず「高校の時の担任が亡くなって……」と言うと、皆も神秘的な面持ちで「それは大変だね……」などと気まずそうにまだ慣れないお悔やみの言葉を探しはじめた。教授だけは「幾つだったの？」とか「何で亡くなったの？」とか聞きなれた様子で色々と尋ねてきた。しかし私が「生徒に刺されたらしいです」と答えると全員が一斉に顔を曇らせ黙りこくった。先生は顔をしかめた。それで慌てて「生徒の喧嘩の仲裁に入って刺されたみたいですよ」と付け加えると、皆ほんの少しだけ気を緩めたが、またすぐに眉間にしわを寄せて、それぞれ小さく所感を述べていた……。

病気でも交通事故でもなく、彼女は殉死した。それは夜のニュースで簡単に報道された。それでもメインのニュースは目前に迫ったらしい国勢選挙のことで溢れており、私は少しほっとした。平井の話では、喧嘩は少々気の荒い男子生徒二人の間で起きていて、まさに「かつ」となった片方の生徒が、近くにあった彫刻刀を振りかざしたときに、仲裁にはいなかった高野先生のクビにあたってしまったそうだ。先生の嘔き出した血がまともに顔にかかった少年はすぐに自分のしたことの恐ろしさに気が付いて気絶した。先生も倒れ、隣のクラスで授業をしていた男性教師が異変を察知し駆け付けてきた。救急車が呼ばれ二人は運ばれた。もう一人の喧嘩をしていた少年は泣き叫んでトイレに閉じこもった。女子生徒が何名か気絶して保健室に運びこまれた。その階にいた生徒は全員退室し、体育館に移動してすぐに集団下校の手筈が整えられた。女生徒には貧血を起こすもの泣き出すもの、うずくまって動けなくなるものが大勢いて、教員は最寄りの駅まで下校する生徒に付き添った……

それは想像するだに地獄絵図だ。高野先生を刺した少年が目を覚ましたら、彼に対して世界がその重苦しい扉を閉ざしてしまったのを見ることになるのか。平井の話聞くに、その少年が意図をもって高野先生を殺したのではないことにほんの少し安堵を覚えながらも、

それだけに一層の凄惨さを感じた。先生の死。本当なのだろうか。さつきテレビに映ったあの先生のポラロイド写真の丸く切り取られた画像。白い襟のあるシャツを着て、ほんの少し微笑んだあの顔。短い黒い髪と化粧つきのそばかすの目立つ透き通るように白い小さい顔。高野先生の死は、こんなに悲惨であつていいのか。信じられない。私には信じられない。

翌日も起きてしばらくして蘇ってきた高野先生の死という事実にもまるで恋煩いのように取りつかれて私は悄然としていた。通夜は明後日になった、と平井からメールがきていた。元三年五組の人間は五時四十分にも●●駅に集合するように、とこんなときでも我を忘れずに事務的なことを取り仕切る平井のメールは、ほんの少し頼りがいがあるように思えた。しかし、その宛先に仁が入っていなかったことで、私は通夜には仁と行こうと決意した。まずそれ以前に、仁が高野先生の死を知っていなかったらどうしようと思ひ、いそぎメールをすると、「知ってる。青井から連絡きた」という返信だった。私の心はこの期に及んで、青井夫婦と先生の通夜で対面することを改めて実感し、波立った。だが、私にはどうしても、その二人がどのように先生の死に接するのか予想することが出来なかった。先生は敏子の未来像のようなものだ。自らの人生の最期の場面が、託宣によって魔法の鏡に映るのを見るために、敏子はその場にやってくるのだろうか。そして、その隣に立つ青井君は、その白い顔をさらに蒼白にして、愛する人の最期の瞬間を予め目の当たりにするために、そんな戦慄をわざわざ経験するために、傍らに寄り添うのだろうか。私の心は、急にざわめき始めた。そして、その不謹慎さに悲しい怒りを覚えた。昔、クラスみんなで読んだ夏目漱石の「こころ」の、主人公の親友が自殺した直後、自分がその恋人を奪ったからという理由が遺書に残されていないかを確認したときの、自身の浅ましいエゴイズムに絶望を覚えた時の感情がまざまざと思い起こされた。

二日後はすぐに来た。雨だった。私が覚えている限りの葬式が全てそうであつたように、悲しみの雨が、まさにしめやかに降り注いでいた。自前がないので祖母の家にいき、母の喪服を借りた。先生を崇拜していた母は泣いていた。それにつられて私も初めて涙を流した。そしてそのタイミングが少し遅かつたことで、さらに心が曇るのを感じた。私は、わざと待ち合わせを他のみんなより少し遅らせていた。列の遠く後ろから、例の二人の姿を見たいと思つたのだ。六時ちょうどに仁と駅で落ち合ったとき、私は緊張でうまく喋ることが出来なくなつていた。が、それはちょうど良い具合に、私が深い悲しみに沈んでいくのだと仁に解釈させる結果を生んだ。仁もまた、いつものような傍若無人な雰囲気は残

っているものの、哀悼の意は嘘ではないらしく沈んだ様子だった。「いいやつほど早く死ぬんだな」と仁が無表情のままさりと云った。その言葉の率直さに私はほんの少し嫉妬を感じた。

「名教師」の誉れ高い先生の通夜には参列者が大勢いすぎた。悲惨な事件を喰いものにするマスコミの取材陣もちらほら見受けられた。日は大分伸びたものの雨が早めた宵の色に染められた寺の敷地内はすでに薄暗かった。入ると遠く通夜の取り行われている本堂の手前にたむろする大勢の黒い人々の中に、平井の姿がなんとか認められた。よく見るとその周りは懐かしい顔であふれていた。だがまだ青井君達は目に入ってこなかった。私はこんな場所で、好きな人を意識しながら朝の全体朝礼のために体育館に集まるときのような緊張感を覚えていることを我ながら恥ずかしく思った。受付で香典を渡す際も、母が持たせてくれた袱紗を開くのとまどつて仁に冷たい目で見られた。私は体中に目がついているような気持ちを何年かぶりに味わっていた。それはその全ての目が誰か一人を探している、それと同時にその一人の視線を意識するあまりに全ての目を恥ずかしげに伏せているような、そんな感覚だった。少女の体中にくつついている、いっせいに睫毛を伏せて微かに瞬いている無数の目。

受付を終えて参列者の列に並ぶと、平井達の一群はすでに本堂の中に消えていた。私の心は打ちひしがれながらも何かを待っていた。たまに黒と白の哀悼の色の布を張った受付へと目をやる。青井君と片島敏子はなかなか現れなかった。私達が本堂に吸い込まれそうになる直前、やっと喪服の二人が電灯が照らす石の参道を受付の方にやってくるのが見えた。あからさまに悲しみをその小さな体全体に湛えて敏子はすでにハンカチで顔を覆っていた。青井君は、自分と婚約者との頭上に広げた傘を片手に持ち、心もち敏子が多く傘の下にいられるように配慮しながら、なおかつ反対の腕で彼女の肩を抱いていた。彼の顔は、四年ぶりに見るその顔は、敏子の方に向いていて同じような悲しみに浸ってはいるものの、彼が奉げる傘と同じように、悲しみすらも自分が彼女の代わりに甘んじて受けるつもりだという姿勢がありありと見てとれた。若い綺麗な男女が悲しみの中に寄り添いあつて倒れないようにお互いを支えている。それはとても美しい図だった。本堂にあがる番がきて、木の小段を上り靴を脱いだ。雨に濡れた靴から浸み込んだストッキングの湿りが、ご焼香の間中ずっと気持ち悪く纏わりついていた。焼香の時に、先生の遺影を真正面から見た。まっすぐにこちらを見ている彼女の目が私の目を鋭くとらえた。この悲しみの頂点において、私は尚その透徹した目が怖かった。前にも後ろにも、私には到底追いつくことのでき

ない世界があった。私は窒息しそうだった。

焼香を終えて出口へ向かう途中、突然悲鳴に似た甲高い泣き声が堂内に響きわたった。その声は私の胸を貫くような響きをもって木造のお堂の中に木霊した。寺内は一瞬静まり返ったが、その木霊に続くように、いくつもの嗚咽や別の泣き声が新しく生まれ出て最初の泣き声、つまり敏子の泣き声に唱和した。私は、見ないように見ないようにとする意識と戦っていた、けれどもやはりそんな意識に勝てるはずもなく、ある一瞬に意を決して堂内を覆う悲哀の合唱の中心にあるその声が聞こえる方へと目を向けた。敏子が、喪服の似合う敏子が、青井君の腕の中で彼の胸に顔を埋めて全身を震わせながら泣いていた。夫の二の腕をつかむ彼女の手には相当の力が入っているようだった。そして、掴まれている青井君は恐らく相当な痛みを彼女の痛みを引き受けるように耐えていた。私は目をそらした。仁とは何も言葉を交わすことなく、私達はお堂を出て参道を門まで引き返した。門を出たところで仁がふと「何もあんな風に泣く必要はないだろ」と無表情でつぶやいた。それに私はかすれ声で「うん」と答えた。心が急激に冷えて行くのを感じた。

帰り道そのまま喪服を祖母の家に戻りに行くために、駅で反対側のホームへむかう仁と別れた。平日の夜の上り方面行きの電車は下りと違って混雑とまではいかなない中途半端な客入りで、私は両手で吊革に掴まってゆらゆらと電車の揺れに体をまかせていた。思考が停止し冷えた心持のまま、私は薄汚れた窓ガラスが自分の死人のような顔を死に絶えたような街の風景の中に気味悪く浮かび上がらせる様を凝視し続けていた。そうしているうちに吊革を掴む手から徐々に力が抜け始め「ああ貧血だ」と思う間に足の力が抜けて、その場にしゃがみこんでしまった。前の座席に座っていたサラリーマン風の若い男の人が慌てて席を譲ってくれようとしたが、それを頑なに断りそろそろと扉の前の角に移動してしゃがみこんだままだった。人々の靴跡で汚れた電車の床を見つめながら、昨日の晩から何も口にしていないことに思い当った。おばあちゃん家に着いたら何か食べなきゃ、そう思っ目目を閉じた。

七月が来た。青井君と敏子の結婚式は最終土曜日、二十八日だった。それほど仲が良くなかったクラスメイトの私にも二次会のお誘いは来たが、私は欠席とメールで返信していた。ただ心のどこかに、ほんの数週間前にこれ以上ないほど完璧な形で喪に服していた二人が、どんな顔をしてこの晴れの日を迎えているのか眺めてみたいという思いがあった。私はただ、私の勝手極まりない欲望だけで、仁とその場を見に行くことを思いついた。

七月二十八日は、朝からまさに澄み切った青空で、夏雲が西の空にかかり、世界がす



に春から夏に変わってしまったことを教えていた。陽はまだ八月のぎらぎらしたものではなく、海の匂いを運んでくるあの夏独特の風が半袖から伸びた腕に絡まっては去っていく。

私は朝からレンタカーをわざわざ借りた。海を見に行きたい、と仁に言っていたのだ。結婚式は午前中に行われる予定だった。その後、海を見に行くのでもなんら問題はないだろう。私は渋滞になる前の環状七号線を北へ仁の家まで向かった。他の車達はどれも、海だとか山だとか、やってきた夏を存分に楽しむための場所へと向かう人達で、車体そのものが浮足立っているように見えた。私だって、その沢山の車と人と殆ど変らない一日を過ぎす予定なのだ。なのに、まるで地獄に向かっていているような気分だった。心は冷え切っていて、外部の空気とは全く正反対だった。それはそうだ。自分で自分の心に死刑執行をしようとしているのだから。こんな夏祭りのような匂いを孕んだ空気に満ち溢れた日に。仁の家は方南町にあり、結婚式場は南青山だった。果たして車が入っていきけるような場所なのか怪しかったがとにかくナビの向うまま、私は仁を拾うと青山方面へと車を走らせ式場へ向かった。

途中仁が何気なく尋ねてきた。

「なんでお前あいつらの結婚式なんて見に行きたいの」

「なんとなく」

少しだけ間をおいて、仁は彼の脇の窓外へと目を向けたまま言った。

「お前、青井のこと好きだったって噂ほんど？」

私は答えなかった。

「ふん、まあ古すぎる話だからどうでもいいわな」

「あの二人、先生が死んだ直後なのに、普通に結婚するんだね」

「……なんかそれに問題あんの？」

「いや」

「あいつらは良い夫婦になるだろ」

仁の声は相変わらず窓に当たって跳ね返ってきた。ただこの一言だけは少しだけ低いトーンで響いたように私には聞こえた。

「仁もそう思うの？」

「俺は二人とも好きだったからね」

その一言が、私を彼から遙か遠くへ押しやってしまったことに気がつきもしない仁は、面白いものがあるとも思えない外の世界をひたすら眺め続けていた。

青井君と敏子の結婚式が行われている式場は青山通りから狭い一方通行の道を少し入った角にあった。ちようどよく式場のチャペルの正面玄関を望める百メートルほど離れた場所にガレージになった駐車場があり、そこに車を止めることにした。怪しまれないように進行方向のまま式場に向かって後ろ向きに止めた車の中からミラー越しに、チャペルの方をうかがった。もう昼になろうという時刻だったので、そろそろ現れるはずだった。仁は退屈そうに携帯でゲームをしていた。

十分ほどたたって式場の係員が二人、チャペルの扉前の階段下に現れて何やら準備を始めた。そうして今度は扉が開き、別の係員の誘導で参列者が一斉に外に出てきて階段の左右に列を作り新郎新婦のための花道を用意した。係員が小さな白い籠に入れた花びらを一つみずつ客に配っているのが分かった。誰もがにこやかに、この若い夫婦を祝福していた。ようやく花道の形が整い、誰もが扉に注目をして無人の入り口に不思議な華やぎが生じたとき、二人は晴れやかにこれ以上ないほど美しい姿で現れた。この時私は小さなミラーには映りきらない光景を見るために後ろをむき子供のように背もたれに向かって膝をついた姿勢を作った。後部座席の横長の窓枠を通して見えたのは、黒服に身を包み、しめやかな雨を背景にした時とは対照的な「光」の中の美だった。敏子はノースリーブのウエディングドレスからラメをはいた輝く白い腕をあらわにして、両手でユリの花があふれ返るブーケを捧げ持っていた。白いタキシードを着た青井君が、彼女の右腕に自分の腕を通して彼女を支えるように注意深く歩いていた。目元の涼しい鼻筋の通った白い顔。ずいぶん長い間恋焦がれて見ていたその顔が今、幸福と優しさに満ち足りて、花嫁と寄り添って階段をチャペルから降りてきた。夏の始まりを告げる、積雲を遠景に控えた水色の空。白壁の教会。白い二人と白い花。青と白。その爽やかな色の組み合わせが、随分とよく似合う二人だ。この白昼には、どこにも悲しみの色がなかった。二人は、その心なんて私に分かるわけがないのだが、どこにも悲しみをたたえていなかった。幸福と未来への希望しか見当たらなかった。その瞬間、自分の唇が皮肉に歪むのを感じて、私は絶望した。私は笑っていた。二人が、高野先生の死なんてたった数週間で忘れて、そんなことどこ吹く風と人生で最も幸福な瞬間を迎えていることを、天国の先生に対して見せつけてやりたいと確かな欲望を持って考えながら。ほらこいつら今、笑ってますよ？ あなたが死んだことなんて、もう過去のことなんですよ？ 喪に服すなんてこと、彼らはしないんですよ？ 次の瞬間には故のない涙が唇を伝って、顎の先から布張りの背もたれへと落ちるのを感じた。私の心は、この窓の外の全ての明るさと何の繋がりもない。醜い汚い心。私の心は誰かの心を

救うこともなく、当然変えることもなく、そして誰かに変えられることもなく、この陰鬱な色彩のまま硬くなり小さくなり干からびていくのだろうか。

煙草の匂いもせず、物音は全くしなかった。微かに寝息と思われる規則正しい呼吸の音が聞こえてきた。目を落とすと仁は助手席の背もたれを半分ほど倒して寝ていた。これ以上ないほど安らかな表情で。痩せた顔には少し疲れが滲んでいた。ふと私は、仁がいつか普通の一般的な幸福な家庭を築いてそこそこの幸せをもって人生を終えるのではないかと思った。仁の目指しているものなど私には分からない。だが、仁には少なくとも春に嫉妬するなんていう屈折した感情は無いようだった。彼もまた春を愛し、春に愛される人なのだ。それはそうだ、仁だって春に生まれた人なのだから。

汚く澱んだ沼のような私の心の奥底から、突然込み上げてきた衝動があった。私は寝ている仁の顔の上に自分の顔をかかめて、彼の寝息がかかるところまでずっと近づけていった。仁の唇に自分の唇を重ねると舌を出して彼の口の中に軟体動物のように差し入れた。寝ている仁の体は無意識のうちに、舌を動かして私の動きに応じた。唾液と舌が絡み合うあの独特の音がして、私の欲望をさらに掻き立てた。仁のズボンの上から彼の性器を触る。すでに硬くなったその部分を撫でさすりながら、理性が頭のとっぺんから段々と下方へずり落ちて、耳のすぐ下、首の上あたりまで落ちてきて鈍く脳髓を刺激するままに、息と唾液がだんだん強く入り混じって、仁の手が私のTシャツの裾から忍び入ってきて始めはブラジャーの上からいつの間にかブラジャーを下にずりおろして胸を触っている、その状況の中で、私はいつしか目をつぶっていた。後は、スカートをまくって下着を脱いで、彼のズボンと下着を脱がせて、その上に乗ればいいだけだ。それだけだ。それで、私の世界は終わり、また新しい世界が始まるのだ。

揺れる車の後部座席の窓から、遠く白い衣装の新郎新婦が見える。その白い姿が上下に揺れる。揺れる揺れる、世界が揺れる、と思ううちに、座席の背もたれがひどい音をたてて完全に倒れ、仁が上に乗っていた。私は目を閉じて、まぶたの内側の黒い世界に浮かび上がる幽霊のような、揺れる白い二人の男女の影を、見ていた。

(了)